產政塾

Ⅱ

産政塾

この編は、三十歳前後で異業種のビジネスマンである塾生が各々、テーマ自由でロマンと心の叫びを綴ったものである。

目　次

・第二期「産政塾」を終えて …… (財)中部産政研　梅村志郎　1
・「夢」―「夢」を探し求めること …… トヨタ自動車㈱　朝位克　5
・違う世界の人々との出会い …… 全トヨタ労連　伊藤哲　13
・今、思いのままを …… 名古屋鉄道㈱　太田雅也　19
・「運命」を変える …… アイシン精機㈱　大町重人　27
・「時間」 …… 東海銀行㈱　桑山幸次　33
・私の進化論 …… 日本電装労組　小西正晃　41

・弱者の視点から、世の中を見て …… トヨタ自動車労組　高橋恭弘　49
・「夢」について …… 豊田合成㈱　種市章　57
・「国際人・日本人・産業人・社会人と企業人」 …… 中部電力㈱　丹羽漸　63
・企業と社員のいい関係 …… 日本電装㈱　松下恭規　71
・日本人らしさ …… ㈱松坂屋　萬谷孝之　77
・産政塾に参加して感じたこと …… 全松坂屋労組　水野和明　85
・価値感を拡げよう …… アイシン労組　水野真二　93
・あなたの夢なんですか …… トヨタ車体㈱　山内潔　101
・豊かさの代償 …… ㈶中部産政研　梶田宜孝　109

・「二〇二〇年に思う」……(財)中部産政研　村井　清……117
・最近想う三つのこと……(財)中部産政研　十亀義則……127
・産政塾活動記録……135
・あとがきにかえて……140

第二期「産政塾」を終えて

（財）中部産政研　理事長
梅村志郎

梅村　志郎（うめむら　しろう）

昭和２年	愛知県小牧市生まれ
昭和16年	トヨタ自動車工業㈱　入社
昭和41年	全国自動車産業労働組合連合会　中央執行委員を始まりに
昭和46年	トヨタ自動車工業労働組合　執行委員長
昭和57年	全トヨタ労働組合連合会　中央執行委員長，全日本自動車産業労働組合総連合会　会長代行などを歴任
昭和61年	全トヨタ産業政策研究会　理事長を経る
昭和63年～	財団法人　中部産業・労働政策研究会　理事長専任
現　　職	全トヨタ労働組合連合会顧問，中部生産性本部顧問

〈趣　味〉……健康とボケ防止のゴルフとマージャン

〈好きな言葉〉……誠

㈶中部産政研が主催した「産政塾」が、このたび第二期を終えた。

産政塾は、半年間のスケジュールで異業種の若者十数名に参加してもらって行うセミナーである。セミナーといっても、あらかじめテーマを決めて講師の指導を受けるという通常のスタイルではない。参加したメンバー自らがテーマや講師を選び、講師のところへ出向いて教えを請うという形をとっている。企業や仕事の枠をこえてお互いが夢を語り、天下国家を論じ、自分自身の役割を考えるという自らを磨く道場といったものである。

人間がもの思う時期は人間形成の基本の時期の青春期であるが、仕事上の人間としての枠の形成期は三十才代の前半からの十年ぐらいといえる。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もつきつつある。精神的にも肉体的にも最も充実している、そんな時期である。

産政塾に参加したメンバーはこの年代の人達である。意欲においても能力においても次代を背負う人材であることは間違いない。

第一期に続いて第二期も、こうした若者十五名が産政塾に参加した。半年間にわたりお互いの夢を語り合い、自らの企画によってその実践に情熱を注いできた。そしてこのたび多くの方々の理解と協力を得る中で半年間のスケジュールを終えた。参加者一人一人がこのセミナーを通して「何か」を得ることができたものと信じている。

昨年、第一期塾生がセミナーの体験をふまえて、自らの率直な思いを「若者のロマンと叫び」と題する冊子にまとめて発刊した。これが多くの人達の共感を呼び好評を得ることができた。産政塾は極めて小規模の催しであり参加してもらうのは限られた人達である。こうした冊子を通じて一人でも多

くの人達の共感が得られるとするならば、主催者としてもこの上もない喜びである。

この冊子は、第二期塾生の「叫び」を綴ったものである。ぜひご一読願いたい。塾生と同世代の人々の共感を呼び自己向上の糧となることはもとより、指導的立場にある人にとっても参考になる点が多いと思う。

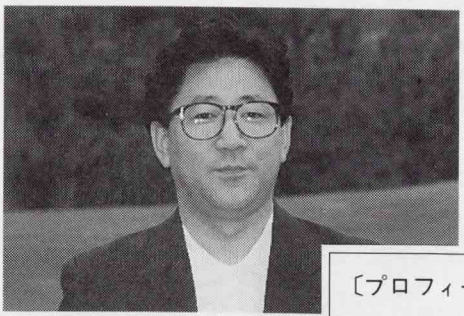
ご一読をいただき産政塾および塾生に対して、ご教導なりご声援をいただくことができれば誠に幸いである。

平成三年十二月

産政塾　塾長　**梅村志郎**

『夢』—『夢』を探し求めること

トヨタ自動車㈱　人事部
朝位　克



〔プロフィール〕

朝位　克（34歳）

- 1957年　島根県に出生
- 1980年　当時のトヨタ自動車販売㈱に入社
  総務部，国内企画部を経て '90年より人事部

〈モットー〉（と言うほどではないが）
「今を楽しく」

〈家族〉　名古屋市平針に
妻１人とうるさい盛りの息子２人

「産政塾」卒塾にあたって

社会人としてスタートしてから十一年。社内では、これまで経験してきた部署や仕事の性格上、比較的多くのセクションや多くの人たちに接する機会に恵まれてきた。

しかしながら、他社、ましてや異業種の方々との交流となると、ごく限られた業務上のお付き合いはあったにせよ、ほとんど皆無に近い状況であったような気がする。

そんな過去を振り返りながら、異業種の、それも年代をほぼ同じくする方々との交流に大きな期待を抱いて、この「産政塾」に入塾してから早いもので八か月が過ぎた。長いようでもあり、過ぎてしまえばアッという間の八か月でもあった。

この間、「産政塾」に集ったメンバーと交流を深めることはもとより、松下政経塾を訪れ塾生の皆さんと熱のこもった意見交換をさせていただいたり、あるいは、青年海外協力隊を経験された方やボランティア活動に積極的に取り組まれる方の体験談をお聞きし、懇談させていただく等々、会社という限られた世界に閉じこもっていたのでは、まずはできないであろう様々なそしてたいへん貴重な経験をすることができたと思う。

こうした経験が、これからの会社生活に、あるいは、人生にどんな形で影響を与えてくれるのか、今の段階では予想すらできないが、何かを思考し、判断しなければならない局面局面で、きっと自分自身を支えてくれるであろうことを期待したいものである。

『夢』について

さて、『二十一世紀に向けて我々の夢を語り合おう』というのが、「産政塾」開塾の趣旨でもあり、塾に集ったメンバーが話し合い、取り決めた塾生の心構えの一つであった。また、今回の〝卒塾論文〟も、「ジャンル、タイトルは問わないが、自分の『夢』が入っていることがベター」ということである。

『夢』とは、いったい何であろうか？

よく言われるとおり、太古の昔から、人類は『夢』を追い、その『夢』をかなえることで成長し、より高度な社会を築きあげてきた。

火を自由に扱う、荒地を開墾し家畜を飼育し豊かな食料を得る、空を飛ぶ、居ながらにして地球の真裏の人と会話を交わす、月面に降り立つ、様々な病を克服し寿命を延ばす、さては、遺伝子を組み替えて新たな生命体をも創りだしてしまう。

また、こうしたエポックメーキングな『夢』の実現ではないにしても、人々は皆それぞれの人生において、何らかの『夢』を抱き、その『夢』をかなえることで、あるいは、それが、かなわぬ『夢』、はかない『夢』であったとしても、その『夢』を追い求め、努力を重ねることで、自らの成長を果してきたのではないだろうか。

まさに、人類の歴史は『夢』の歴史でもある。

さて……、自分自身の場合は？　自分自身の成長を支えてきた『夢』とは何だったのか、そして、これからの自分の歴史を創っていく『夢』とはいったい何なのであろうか？

暫し、自問自答……。

進学校に進み、それなりの大学に入り、それなりの企業に入社すること、それが『夢』だったのか。確かに、進学のため、就職のために勉強もしたし、いくらかの努力も重ねてきた。そして、そうした苦労を通じて少なからず成長もしてきたはずである。その意味では、これが『夢』だった、『夢』をかなえることができた、と言えるはずである。

しかし、本当にそうか？

「あの学校でこんな勉強がしたい」ではなく、〝偏差値〟という絶対的な数字に「行けそうな学校」を決めてもらい、あるいは、「銀行で仕事がしたい」という『夢』らしき思いを抱き銀行だけに的を絞っていたにもかかわらず、どんな巡り合わせか全く畑違いの会社に来てしまった。（あえて断っておくが、決して後悔しているのではない。）

こうした現実を振り返る時、その道のりを「『夢』を追い求めて歩んできた道」とは言い切ることができないような気がしてならない。

では、会社に入ってからはどうだったのか、そして、これからの会社生活における『夢』とは。

係長、課長、部長、そして、……、競争社会の中で昇進の階段を昇っていくこと？　サラリーマンであれば誰しもが抱く『夢』であろう。そのために日々努力を重ねていくことは決して無駄なことではない。

しかし、それを『夢』として追い求めるだけでは、たとえそれが現実のものとなったとしても、学生時代を振り返る時と同じような、一種の虚しさに似た感覚を覚えるだけということになりはしないだろうか。何かもっと大きな『夢』、会社生活をより充実したものにしていくための心の支え、そういう面での『夢』を持つことが必要なのであろう。

それはいったい何か、・・・・・?????。らしきイメージすら描けないという訳ではない。しかし、会社という組織の中の一個人としての自分、そして、自分に与えられた仕事という〝現実〟に直面する時、その〝らしきイメージ〟を自分の『夢』として明確に位置づけることができないのである。

『夢』を持ち、それを追い求めていくことが自分自身の成長に欠かせないことであると思いながらも、ハッキリとした『夢』を抱けないまま時がどんどん過ぎてしまうのであろうか……。

改めてこれまでの人生を振り返ってみる。

小学生の頃までは、「電車の運転手になりたい」「野球の選手になりたい」「医者になって苦しんでいる人を助けてあげたい」等々、そうありたいと思ったことをそのまま何の抵抗もなく自分の『夢』として口に出すことができた。

あの頃の『夢』こそ、〝現実〟や〝常識〟にとらわれない素直な心の現れであり、本物の『夢』と言えるものではなかっただろうか。かつて人間が空を飛びまわる鳥を見て「空を飛びたい」という『夢』を抱いたように。

しかし、いつの頃からか、〝現実〟を意識せざるを得なくなる。きっとそれは、中学に進み受験とい

う〝現実〟のただ中に身を置くことになった頃からではなかったか。

〝現実〟を前にして、『夢』を語ることに口を閉ざし（いや、口を閉ざされ）、〝現実〟の中で〝実現〟可能な目標を自分自身の『夢』に置き換えてしまっていたのではないだろうか。

現代社会とても同じである。高度成長期、社会そのものが未成熟であり、どんどん拡がりを見せていた時期には、社会のいたる所に『夢』の入り込む余地があったはずである。そしてまた、『夢』を受け入れることで社会は大きく成長してきた。

しかし、安定期を迎え、オイルショックや円高という逆風を乗り越えてきた今、社会は成熟し、高度に整えられつつある。そんな現代社会にあっては、『夢』の入り込む余地、『夢』を受け入れる余裕は、かつてほど大きくはなく、人々は現代社会という〝現実〟の中でしか『夢』を語れなくなってしまっているのではないだろうか。

「若者に『夢』がない」と言われ、あるいは、多くの企業が二十一世紀に向けて自らの変革を声高に叫ぶ所以でもあろう。

『夢』――『夢』を探し求めること

『夢』とは、「〝現実〟から解き放たれた理想であり、素直な心の現れである」、そして「この素直な心こそ『夢』を育む大きなエネルギーである」と考える時、同時に、この現代社会の中で『夢』を持ちつづけることの難しさを感じる。

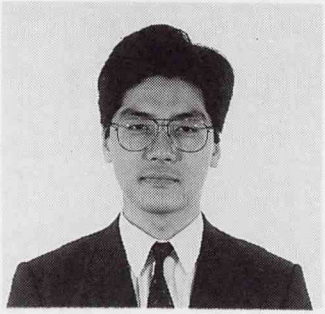
〝現実〟の中で生き、その〝現実〟に忙しく追い立てられる中で、〝現実〟から解き放たれ、あの幼い頃のような素直な心を持ちつづけるということは並大抵のことではない。ともすれば、〝現実〟から取り残され、現代社会の中で生き残ることができなくなってしまうのではないかといった危惧をすら抱いてしまう。

しかし、人類の歴史が物語り、社会の歴史がハッキリと示しているように、『夢』なくして成長はあり得ないのである。

「常に自分自身の『夢』とは何かを追い求める、そして、そのために、いつまでも幼い頃の素直な心を大切にする」そんな『夢』を持ちつづけながら、これからの人生を精一杯生きていきたいものである。たとえそれが、一生かけても解のない、かなわぬ『夢』であったにせよ、自分自身の『夢』を探し求めること自体が、自らの成長を支えてくれることを信じてである。

違う世界の人々との出合い

全トヨタ労連　執行委員
伊　藤　　哲



〔プロフィール〕

伊藤　　哲（31歳）

- 1960年　愛知県名古屋市生まれ
- 1983年　㈱豊田自動織機製作所　入社
  人事部，特許部を経て，1988年より労働組合専従
- 1990年　全トヨタ労働組合連合会へ

〈モットー〉　cool head, warm heart, hot passion
〈家族〉　妻，長男
〈趣味〉　クラシック音楽

日本の社会は、学者なら学者、政治家なら政治家、それぞれの社会が独立していて、相互の人的交流がないということが、よく言われます。確かに、アメリカ合衆国の、政治家が、大学教授に転身したり、弁護士がビジネスマンになったりするダイナミックな社会とは、随分異なっています。どちらがよいかということは、一概には言えないのでしょうが、日本の場合は、異なる社会からの刺激がない分だけ、〝世間常識〟とか〝良識〟といったものが、働きにくくなっているのではないでしょうか。「学者は世の中の実体を知らない」とか「政治は永田町の論理で動く」とか、最近よく問題にされる〝企業倫理の欠如〟なども、元をたどっていけば、こうした日本の社会の特質が起因していると思います。

われわれサラリーマンも、企業の中に長くいると、いつの間にか全てのものごとを、経済とか効率という観点から見るようになってしまうような気がします。「よりよい社会」とか「社会正義」なんていう言葉は、使うのも恥ずかしいし、オフィスの中で言おうものなら、ちょっと変わったやつと思われかねません。

しかし、本当は国民のマジョリティであるわれわれサラリーマンが、こういったことを少しずつでも考えていないと、日本の政治や社会の仕組み、そして何よりわれわれの暮らしが良くならないのではないでしょうか。経済一流、政治三流と言われるのも、こうした意識の欠如が起因しているのでしょう。

話が広がりすぎましたが、そんな意味で、十年近くたまったアカを落として、自分たちとは、全く違う世界に生き、違う目を持った方々と話ができる機会を持てたことは、望外の幸せでした。

また、普段妻との共通の話題は、子供のことくらいでしたが、産政塾で聴いた話をすると、それをネタに夜遅くまで、夫婦の会話が弾んだことも、これまた望外の喜びでした。

以下、会合ごとの感想を記します。

〈第二回　九一年二月二十八日～三月一日　松下政経塾訪問〉

みずからの手で、日本をそして世界を良くしたいという熱い思いに燃えている同年代の男女を見て、「がんばってほしいな」という気持ちを強く持ちました。そして日本の若者（年寄りくさい言葉ですね）も捨てたもんじゃないな、と思ったり……そうした彼らの情熱に触発されて、環境問題を研究しているうら若き女性に、むきになって議論をふっかけたりしたことも、良い思い出です。

また塾長の宮田義二さんのお話しを聴けたことも、素晴らしい体験でした。氏の仕事への姿勢（単に目の前の、ということではなく、日本や日本の労働界の将来を願う使命感みたいなもの）に感動しました。その後氏の書かれた本を読みましたが、その本は、労働組合の役員の端くれとして、これから仕事をしていくうえでの、基本姿勢みたいなものが見えてきたという意味で、折に触れて読み直す一冊となっています。

〈第三回　九一年四月二十三日　金城学院大会山本教授との意見交換会〉

ご専門のインドネシアのお話しをうかがいましたが、印象に残っているのは、むしろ山本教授の人柄。大学教授と言えども、組織人としてのしがらみはいろいろあるのでしょうが、まさに自然体で生

きていらっしゃる。私もああいうふうに生き、曇のない目を持ちたいものだと思いました。

その後、中部産政研の専門委員会でも、たびたびお目にかかっていますが、お会いするたびに、その素晴らしい人柄に魅かれます。

今度是非「今日の女子大生の生態?」なるご講義も拝聴したいと思っているのですが……。

〈第四回　九一年六月三日　中村光之さんとの意見交換会〉

青年海外協力隊で、アフリカに二年間行ってこられた直後に、生々しい体験談をうかがいました。私自身は、会社生活も十年近くになり、妻子や家も持ち、一人前の人間になっていたようなつもりでしたが、実は枠にはまって生きるのがうまくなっただけで、本当に独力で生きていく力は、どんどん衰えているのだなと思いました。彼にある、輝く目と輝く肉体が、自分にはないとわかって、ショックを受け、落ち込んだ一日でした。

余談ですが、これを景気に、週一回プールに泳ぎにいくことに決めました。インストラクターからは、週三回来ないと効果がないと言われていますが、強靱な肉体には程遠いものの、ストレス解消にはなっているようです。

〈第五回　九一年七月十二日　京都ボランティア協会の玉川さんと福祉を研究している山井さんとの意見交換会〉

「charityではなく、equalityの思想が大切」という言葉が印象的。日本のいままでの福祉が、「お恵

み」の発想であったということが、よくわかりました。そしてそれと同時に、福祉は福祉関係者が考え、行うものという意識を払拭することも大切だと思いました。

五月の日経新聞にこんな社説が載ったそうです。「衣食足りたあと、職場では仕事を通じた自己実現を、生活面では真の豊かさの実現を目指すビジネスマンも増えている。ただ、真の豊かさとは何であろうか。単なる快楽の追求で自己満足にとどまっているだけではないはずだ。生活を楽しむと同時に、恵まれない人たちのために尽くし、社会的に必要な奉仕活動に献身する。これが精神的充実感を伴う真の豊かさであろう。」

また、山井さんが、岩波新書「世界の高齢者福祉」で書かれているような、社会民主主義型の高福祉というのは、ヨーロッパにおいても曲がり角にきているように思いますが、彼らの貴重なチャレンジから、日本が学ぶべきことはまだ多いはずです。八月にスウェーデンに旅立たれた山井さんご夫妻の活躍をお祈りしたいと思います。

〈第六回　九一年八月一日　企業の社会貢献で知られる木原孝久さんとの意見交換会〉

今話題の企業の社会貢献の話。氏の言う「企業自ら持っているノウハウを活かし、儲けにつながることを良しとする」という発想は、良く聴いてみれば、まさに正論です。こうした方面の人にままありがちな青臭い書生論ではなく、現実をふまえているところに感心しました。

企業の社会貢献は、まだ歴史が浅く、企業にも受ける側にも、戸惑いやすれ違いがあるようですが、やがてそれらを乗り越えて、アメリカのような自然で良い形ができてくるような気がします。

以上、それぞれの方からうかがった話をもう一度振り返り、自分なりに整理してみる意味もあって、感想を長々と書きましたが、もちろん、塾生同士の交流も有意義でした。酒を入れての、普段会社ではしたこともないような高尚な議論から、とてもここには記せないような卑俗な話まで、毎回話の花が咲きました。トヨタ系以外の方と知り合えたのも、喜びでした。特に松坂屋の萬谷部長？（まさに風貌は部長そのもの）や水野書記次長からは、賢いスーツやネクタイの選び方から、バーゲンの利用方法まで、様々な秘伝を伝授いただきました。

それにつけても、産政塾が半年で終わりというのは短すぎます。やっと気心が知れて、これからというところで終わりですから。ぜひＯＢ会を作って、仕事や年齢や肩書抜きのお付き合いを、いつまでもお願いしたいと思います。

最後に、こうした機会を作っていただいた中部産政研の方々にお礼を申し上げるとともに感謝申し上げます。

そして第二回産政塾塾生の今後の活躍と健康を祝して　乾杯！

今，思いのままを

名古屋鉄道㈱　人事部
太　田　雅　也

〔プロフィール〕

太田　雅也（29歳）

- 1962年　大阪府大阪市出身
- 1985年　名古屋鉄道㈱　入社
- 1986年　㈱びわ湖バレイ出向
- 1988年　名古屋鉄道㈱　人事部勤務
  現在に至る

〈モットー〉　一日一日を大切に

一　はじめに

一九九一年一月三〇日、産政塾の第二期生の一人として参加させてもらってからはや九カ月、この第七回の会合で最終回を迎え、記念となる本の出版をとのことで今筆をとっている次第である。「自分の夢」を入れて、これまで六回の会合をふまえてジャンル問わずの文章を書くというのは苦痛である。内容については多分、支離滅裂になるであろうがお許し願うとして、とりあえず書き進めていくこととしよう。タイトルはその後で考えることにして…。

二　入社後六年間の歩みと現状

昭和三七年にこの世に生を受けてから今日現在二九年間の人生を送ってきた。ついに、自分が人生の一つの目途としてきた三〇歳がもうすぐ目の前である。若い若いと思っていた自分も、職場においては中堅クラスになり、ガムシャラに突っ走ってきたこれまでと違って、少しづつさらなる自覚を持って行動をしなければならない状況になってきたわけである。

「名古屋鉄道株式会社人事部労政担当」これが今の私の職場である。昭和六〇年に入社し、一年間、鉄道・自動車現場等で実習し、翌年から二年と少し、滋賀県のあるレジャー会社（スキー場）で研修をし、六三年に本社の人事部に配属となった。二年間の研修時代は営業ということでホテルの予約、レストランのウエイター、スナックのマスター、宴会係、リフト券発売などなど人手不足と悪い労働条件の中、かなりハードな仕事をこなしてきたつもりだ。私の今までの会社生活の中で一番苦しく、

かつその反面やりがいもあり非常に勉強になった時期だったと思う。学生時代の甘い気分は吹き飛ばされ、人間関係の重要性や「和」の大切さ、「耐える」ということを学び、また、同世代及び現地の同期との友情は強いものとなった。その後、人事部にお世話になりこの二年余り完全なデスクワークということで社内の昇格試験や人事考課担当としてまさしく「人」の「事」に携わる仕事に就き、昨年の八月から現在の担当となり会社の人件費予算、賃金関係、組合との折衝などかなり奥の深い仕事をさせてもらっている。若輩者の私にとっては荷の重い仕事であり、作業量であるが、まずまず充実した日々を送れているといえようか。

三　酒・競艇・阪神タイガース

そんな日々の合間の憩いのひととき、本来の仕事から離れたところにある（たわいのない）私にとってのもう一つの充実した（？）時間は次のようなものである。

酒

私は大のビール党であるが（水割りも飲みます）、飲みながらの仲間との交流、特に議論が好きである。飲んだときにしかできない話、その中で垣間見える人間の本性、このひとときが私は大好きである。さらにカラオケで歌うサザンオールスターズがあればもう最高。ただし、翌朝の二日酔いは苦しいが…。

競艇

たかがギャンブルというなかれ。スタートの一瞬にすべてを集中する選手達の迫力。あのモー

ター音が好きである。天気のいい日に競走場で缶ビール片手に過ごすのんびりした一日、これもまた一興である。また、選手達の命を賭けた仕事は我々サラリーマンとは違った一種独得の緊張感が感じられる。ここにも一つの人間の生き様がある。

阪神タイガース

大阪生まれの大阪育ち（中学生まで）、物心ついたときには江夏、田淵といった選手達の姿を追っていた。巨人を倒すのは阪神しかないと思っていた。№2の美学がそこにはあった。現在、周りは全てドラゴンズ一色といった中、根っからのタイガース狂。あの甲子園球場のライトスタンドの一体感、声を枯らしスタンド狭しと走り回りながらの大声援、ストレスの発散にはもってこいだ。（ただ近年、全くもって弱いわけだが、本当のタイガースファンにとってあまり勝ち負けは重要ではない？そうじゃなきゃやってられないし…）

また、私の目標とする人物をあげるとすれば、あの「掛布雅之」氏である。最近でこそコメディアンのようになってしまったが練習生同然の立場からひたむきな努力と根性で阪神のいや球界の顔になった男、怪我が引退を早めたのが惜しまれる。

ゴルフ

大変下手でなんともならないが、コース上を右往左往しながら一八Hをクリアするのは、なんとなく私の人生の縮図のようでもある。

四　中部産政研よ、ありがとう

「自己啓発」、大変すばらしく味のある言葉であり、実践しようとはしているが、なかなかできないことである。前述の仕事と余暇（遊び）の中で得るものとは別のものを与えてくれたのが中部産政研主催のこの「産政塾」ではなかったか。

ある程度予想をしていた通り、社会人になった瞬間に人とのつき合いはそのほとんどが会社の人間に限られてしまう。入社してまだ六年少しの自分であるが、やはり外部の人との接触がないと社内が全てとなり一面的な物の見方しかできなくなる。そんな中で、異業種間交流を行い視野を広げるには最高の場を与えてもらったわけである。閉塾式を含め七回の会合のうち二回出席できなかったが、第二回の松下政経塾の体験入塾での塾生との夜半までの激論、様々な講師を迎えての講演会及び懇親会の席での意見交換等で話を聞き、語り合った時間は、今後の私にとって貴重な財産として何らかの形を残してくれるものであろうと自負している。

また、四月の末には、これも中部産政研主催の対談『中堅社員は今…』にも参加させて頂き、拙いながらも自分の考え、意見を述べ、異業種の方々との交流の場を設けて頂いた。他のメンバーも年齢的にも同年代であり、同じような立場にあることを認識する反面、新しい発想に驚かされたり、自分の考えの甘さを反省させられたりと貴重な時間を過ごさせてもらった。

五　今、ふと思うこと

人生八〇年時代を迎えたといわれる今日にあって、私自身そのうち三〇年近くを生きてきたわけであるが、「人」というものの大切さを最近強く感じるようになってきた。

職場における人間関係しかり、この二九年を振り返ってみても、自分が苦しんでいるときにその支えとなって助けてくれたのはまぎれもなく「人」であった。今、当社においても労務構成の若返りが進み、「新人類」という言葉に代表される以上の多様な価値観を持った人間が増えてくるにつけ、業務を円滑に遂行するにあたり、その職場内の人間関係はますます重要になってきている。

また、私は現在、ある団体のオピニオンリーダー養成講座の運営委員の一員として参加させてもらっており、その場でも「人」と「人」とのつながりの大切さについて若手社員に話をしたり、一緒に考えたりする機会があるが、その時にもこの産政塾で得た知識、経験は間違いなく生きている。たかが八〇年、されど八〇年の人生を楽しく、意義あるものにするためにも「人」について今一度深く考えなければならないなと思う今日この頃である。

それともう一つは、当然のことなのだが、「自然」の偉大さについて再認識させられたことである。今現在なお九州を襲っている火砕流の一件や、先頃連続して日本各地を襲った二大台風の影響は、当社の鉄道・自動車部門にも多大な被害をもたらした。一部には、近年の地球環境破壊問題に触れ「自然の怒りだ」との冗談とも本気ともつかないような声も上がったほどの大きな災害であった。文明社会といわれる今日にあって、どんなに技術進歩がめざましいとはいってもやはり人間は「自然」の前

ではいかに無力であるかということをまざまざと見せつけられたわけである。さらにつけ加えればこの「自然」の力によって大切な命を落とした人もいるように、人生八〇年とはいうものの、逆をいえば、不慮の事故により明日をも知れない命ということもできるわけで、そうなるとやはり一日一日充実した日々を送り、今日の日を精一杯生きなければと、そんなことをふと思ったのは私だけであろうか？

六　「自分の夢」とは？

この文章作成にあたり「自分の夢」について何か触れねばならないということなのだが、「さて、どうしたものか」と頭を抱え込んでしまった。

例えば、小さい頃ならば「パイロットになりたい」とか「プロ野球の選手になって、日本一になる」などというのが夢であり、希望であったのだと思うのだが、今の自分には何があるだろう。「夢」というものは、やはり年相応によって変わってくるものなのだろうし、逆に、それが実現したときにはそこで終わってしまうものともいえるだろう。そういったことからすると『夢』＝『目標』であると限定して考えるか、あくまでも『夢』＝『理想』であると考えるかで違ってくるように思われる。

「夢のない人生は寂しい。」とよくいわれる。確かにそうだろう。「若者よ大志（夢）を抱け。」、まさにそのとおりである。しかし、情けないことに私はそんな大きな夢について考えたことがないような気がする。

周りからみると「なんだ、そんなことか。たわいもない。」とおっしゃられるかもしれないが、

『日々充実した毎日を送り、一日が無事終わった後、シャワーを浴びて、ビール片手に、サザンオールスターズを聞きながら一日を振り返ったときに「今日は満足だった」という日を一日でも多く過ごすこと』、それが「私の（ささやかな）夢」といえるかもしれない。意外と難しいことではないかと思うのだがいかがなものだろうか。

七　おわりに

長々ととりとめもないことを書いてきたが、自分で読み返してみても何かまとまりがなく、まともな文章になっていないのがよくわかる。

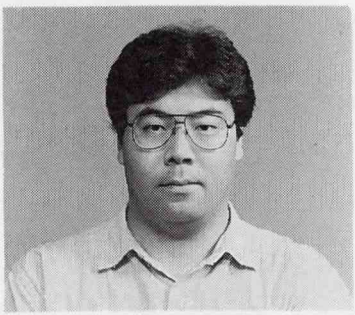
第一期生の書かれた本を横に置いて「皆、素晴らしい文章を書いてみえるな」と思うにつけ、非常に恥ずかしいできとなってしまった。

最後に一言、孔子の言に「三十にして立つ」という名言があるが、ちょうど私もその歳に近くなり、この機会に（この文章を作成するにあたり）自分の二九年の人生を少しでも振り返ることができたのはとても有難かった。また、この世に生を受けてこのかた何らまともな足跡も残していないことを再確認したことも事実である。三〇歳という一つの人生の大きな節目を前に、この先の人生を有意義なものとするためにも、この半年間の「産政塾」で得たことを生かしていかねばならないと気持ちを新たにしている。

また、この「産政塾」がこの先、第三期、第四期と続くことを期待して筆をおくことにする。

「運命」を変える

アイシン精機㈱　人材開発部
大町重人



〔プロフィール〕

大町　重人（33歳）

- 1958年　愛知県名古屋市生まれ
- 1983年　アイシン精機㈱に入社後，城山工場原価課へ配属
- 1988年　人材開発部人事課
- 1991年8月　アイシン・エーアイ㈱経営企画室へ

一　妻の病気

私は、人生三十年余にしてはじめて、神様に本気でお願いをした。それは、妻が突然の病気で倒れ、生きるか死ぬかの手術をする、その日の朝早くのことであった。

今まで私は、神や仏にお願いをして、何かを達成しようなんて思ったことは一度もなかった。なぜなら、私は、何もかも自分の力でやれると信じ、そして、やりぬいてきたつもりでいたからである。だから、高校受験の時も、大学受験の時も神社や仏閣におまいりなどしたことは一度もなかった。そして、おまいりをするということは、心弱き人々の行為であり、自分は絶対にそんなことは行うまいと確信していた。それが、妻の病気、手術という現実の前で、ただ時間がすぎるのを待つだけしかできないもどかしさ。何かにすがりつきたい気持ち。そんな気持ちが私を神社へと足を運ばせた。

二　人生の転機

病院で妻への付添いをしていた四か月間、私はそこで人生について改めて考える機会を与えられた。『生きる』ということ、『死ぬ』ということ、『人のやさしさ』、『自分が今まで何をしてきたか』、妻の眠り顔を横にしながら、様々な思いがかけめぐった。そして、とにかく今の私がやらねばならないことは、時間の許す限り彼女のそばにいて、彼女の不安を取り除いてやること、そして、それが自分に課せられた使命であると感じた。私は妻が入院している間、一日も欠かさず病院に足を運んだ。会社の仕事が忙しい時は、始業前に会社に行き、残業分をカバーした。それでも仕事が遅くなる時は、夜

中であろうと、妻と一言でも話ができればと思い、病室に忍び込んだ。

そんな日々が過ぎていく中、妻の病気が回復に向かい、個室から二人部屋へと転室ができるほど良くなってくると、私にも病院の中のすさまじい光景を目にする余裕が出てきた。大学病院の、しかも脳外科というところは、経験したものでなければ想像できない程すさまじいところである。頭からチューブを出して点滴している患者もいれば、『トイレで急に倒れて、そのまま・・・』という場面にも遭遇した。また、小さな女の子が必死にガンと闘っている姿も身近にあったし、廊下の片隅では、マヒした足を少しでも動かせるようにと、何度も倒れながらリハビリしている青年の姿もあった。

そんな中で生活しているうちに、何となく今までの自分になかった新しい考え方が私の心の中に芽生え始めているのに気付いた。

今まで、私はこのようなハンディを背負った人々にけっして『やさしい』人間ではなかった。常に競走社会の真っ只中にいた自分は、『勝つことが正義』であって、弱い者がハンディを背負うことは、当然のことだと思っていた。だから、病院で見た様々な光景はまさにこの思いあがった私の考えを変えさせるにあまりあるものであった。弱い者は、何もしてないから弱いのでない。必死に努力しても、必死に頑張っても、なかなか普通に戻れないけれど、それでも皆が必死に病気と闘っている。そんな姿を見て、今までの自分が本当に恥しかった。『妻が退院したら、少しでもこのような人々の役にたてることをしたい。』そんな気持ちで一杯になった。

そして、妻の病気も全快し、自分自身の生活にも余裕が持てるようになった今年、上司から、この産政塾への参加の打診があった。梅村塾長のもと、皆で様々な社会問題について話し合い、自己を磨

きあげるものだと聞いた。『これからどうやって社会に恩返しをしていこうか。』と考え始めていた私は、絶好のチャンスだと思い、参加させて頂くことにした。

三　運命について

先日、ワープロのキーを叩いていて、ふとこの光景はどこかで見たことがあるなあという気持ちになった。つまり、何カ月か前に、その光景は夢の中の一シーンとして経験済のことであった。皆さんもたぶんそうだと思うが、私も過去に何度かそのような経験をしたことがある。そんな時、自分の手相を眺めながら、何となく『自分の運命って、既に決っていて、そのとおり演じているだけなのかなあ。』と虚しさに襲われたことがよくあった。そして、もしそうならば、『こんな楽な事はない。』と開き直っていた。

そんな私が、今は、そのような気持ちではなく、『運命が決っているなら、どうにかして自分の力で運命を変えてみたいものだ。』と思うようになった。これは、病院で必死に病気と闘い、自分に課せられた運命と必死に闘っている患者の皆さんに刺激されたからである。そして、妻と一緒に妻の病気と闘い、それに打ち勝った自身がそう思わせたのである。このことが、私の人生の選択に非常に大きな影響を与えたと言える。

四　新会社への異動

一九九一年八月一日をもって、私は、アイシン精機人材開発部から、アイシン・エーアイの経営企

画室へ異動した。このアイシン・エーアイという会社は、アイシン精機のマニュアルトランスミッション部門を分離、独立させた会社であり、知名度はなし、従業員は七〇〇人弱のはっきり言って中小企業である。その会社に私は自らの意志で行くことに決めたのである。これには、私自身、様々な葛藤があった。『将来性や安定性は本当にあるのだろうか。』とか、『妻や妻の両親は、この話を聞いて何と言うだろうか。』、また、『学生時代の友人はどのような目で自分をみるだろうか。』、様々な思いが脳裏をかけめぐった。その中で、一つのこだわりとして私を動かしたものは、『自分の運命は、自分で決めたい。』という思いであった。『妻の病気』、『病院での体験』という、私の考え方を根底から変えさせる事件がなかったら、たぶん私は、安全策を選び、新会社に行くことなどＯＫしなかったであろう。少しでも立場が上で、その立場を生かして仕事ができる方を選択したであろう。しかし、私は何もかも捨てて、新会社に飛び込むことができた。そして、今、後悔どころか、自分自身のとった道に非常に満足してある。なぜなら、この選択をすることで『自分の与えられた運命に対し、少しでも反抗できた』と思えるからである。それがたとえ、生まれた時から定められた『運命』であったとしても……。

五　新会社にかける『夢』

今、私は経営企画室で、長期経営計画の策定を通して、新会社の将来像や戦略を明確にする仕事に携わっている。よく世間で『生みの苦しみ』という言葉を使うが、まさにそのとおりで、ここ数年は、資金面など非常に大変である。しかし、ここで共に働く上司、先輩、同僚、後輩、すべてがいきいき

と、『毎日が勉強だ。』と言いながら仕事に励んでいる。それがなぜかと考えてみると、

① 自分たちが新しい目標に挑戦しているという自負がある。

② 今まで以上に大きな権限を与えられ、仕事に熱中している。 からである。

そして、忘れてならないのは、いつか、アイシン精機に追いつき、追い抜かし、アイシン精機に残った皆が、『あの時、アイシン・エーアイに行けば良かった。』とか、『アイシン・エーアイって良い会社になったなあ。』と言わせたい。このような思いがあればこそ、一生懸命にいきいきと仕事ができるのである。

私も、将来、アイシン・エーアイが、この愛知県で、いや、この日本で一番魅力ある会社として認められるよう、力一杯頑張るつもりである。そして、子供ができて大きくなった時、『お父さんって、良い会社に勤めているんだね。』と言われれような、そんな会社に育てていきたいと思う。

六 最後に

今回、このような『本』の出版という機会が与えられ、今まで自分の考えや思いを述懐しながら、思いっきり紙面にぶつけられたことは、大変有意義なことであった。そして、将来、この本を読んで、自分に少しでも共鳴してくれる人がいたら、そんな嬉しいことはないと思う。

最後に、塾で話し合い、そして体験したことは、私の肥やしとして将来の自分に大きな影響を与えてくれると思う。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

時　　間

㈱東海銀行　本店営業部
桑　山　幸　次

〔プロフィール〕

桑山　幸次（36歳）

- 1955年　愛知県常滑市生まれ
- 1978年　東海銀行一宮支店　入行
  人事部，浄心支店を経て
- 1989年　本店営業部（営業第五課）
  現在に至る

〈モットー〉　楽しく生きる
〈家族〉　妻，子供（息子１人，娘２人）

子供の頃、時間はもっとゆったりと流れていたような気がする。

誕生日や遠足が近づくと、とくにその流れは遅くなり、あと何日と毎日〳〵気をもんだ。

一か月先のことは遥かかなたであり一年先は想像もつかない未来。ましてや大人になるなど現実の問題とはとても思えなかった。

何故だろう。楽しみにしていることをいつも思い描き、未知の出来事の虜になったとき、もう頭の中はそのことでいっぱいになる。そんなとき、早く過ぎて欲しい時間は意地悪にも、じらしながらなかなか進もうとしない。こんなふうだから前日の夜など胸が高鳴ってねむれるはずがない。結局、緊張に疲れ夜ふけにやっと浅いねむりにつくのだが、不思議に朝は早く目が覚める。

ところがどうだ、いざ当日を迎えると、あんなに遅かった時の流れは急に速度を早め、楽しい一日はアットという間に過ぎ去ってしまう。何とも意地悪な話しだ。

それでは逆の場合はどうかというと、憎らしいことに待ってもいないのに知らない間に目の前に迫り、いざその時になるとなかなか過ぎ去ろうとしない。テストなどは最たるものだ。

「中年への危機感」

自分がどんな気持ちでいようが時間は一定のはずだし、実際時計の針はいつも変わらぬストロークで時を刻んでいる。

でもやっぱり時間に長短はある。極めて人間的な〝感情〟というプリズムを通して感覚的に時間を感じているからではないだろうか。

そう考えたとき、冒頭の「子供の頃時間はもっとゆったりと流れていた……」というのは言いかえれば、今よりもっと全てが新鮮に映り、それに素直に感動できた証しではなかったか、と思えてくる。たしかに年を重ねるにしたがって、感情の起伏は小さくなり、それとともに最近では、一年くらいまたたく間に過ぎ去っていく。

これは年令と経験が相関関係にあることを考えれば、ある程度やむをえないことかも知れない。考えようによっては、ものごとに感動したり、新鮮に見ることができなくなった世代が〝中年〟と言えなくもない。その意味では自分も立派なオジサンの仲間入りしているのではないか、という危機感を抱かざるをえない。

最近とくに感じるのは、自分から能動的に行動することがおっくうになり始めたことだ。面倒なことは、できれば誰かがやってくれないかと待つ気持ちが芽生えてきた。

良くないことだ。そうはいっても、仕事の面ではやらざるをえないので、その反動が私生活の面で色濃く出る。自分がどんどん怠惰になり、日々に流されていくことへの罪悪感と、反対の片隅にある心地よさ。この両者の間を行きつ戻りつ、さまよいながら結局は安易な道を選ぶことになる意志の弱さ。反省しきりである。

こうなると、もはや自ら道を切り開くことは不可能で、誰かに相当強いインパクトを与えてもらわなければ変わりようがない。

私にとって〝産政塾〟への参加は、またとない外圧であった。

自分が変わったとまでは言えないが、少なくとも今まで考えたこともないテーマに接し、おおいに

刺激を受けたことは紛れもない事実だ。

「働くことと時間」

産政塾では、主に福祉や地域社会とのかかわりについてテーマとする機会が多かったが、自分にとって全く未知の分野の話に入り込んでいくにつけ、一方で今までそうしたことに関心をもたなかった自分にとって、仕事とは……、ということを考えさせられた。

トヨタ自動車が九州や北海道、東北に進出し、工場を分散するというニュースが伝わったとき、私は非常にショックを受けた。トヨタ自動車は愛知県を中心に、とりわけ西三河に工場や関連部品メーカーを集約することでジャストインタイムのトヨタ生産方式を可能にし、高い収益率を達成してきたはずだ。

その意味で地方への進出は従来のやり方によるメリットを放棄してでも決断せざるをえない事情があったはずだ。

その事情とは何なのか。要因はいくつも考えられるが、その中の一つに、三河では人が集まらなくなってきていることがあるように思う。

中部の企業は歴史的に、その労働力の多くを九州方面からの流入に依存してきた。ガチャマンと言われた頃の繊維業界もそうだったし、今の自動車産業もそうだ。

ところが、近年九州でもめっきり人が採れなくなってきた、という話を耳にする。新卒者が減ったわけではないだろうが、どうも来てくれなくなった。これにもいろいろな理由があるだろうが、私に

は〝働く〟ということに対する考え方が変化してきているように思えてならない。

かつて近くに働き口が少なく、兄弟も多いという環境の中では地元に残ることは物理的に不可能で、生きる為には働き口のある場所へ出ていくしかなかった。しかし今はもう状況が違う。子供の数も減ったし、ある程度働き口もある。そんな環境の変化が、働くということに対する意識そのものを大きく変えてきているように思う。

働くということがストレートに〝生きる〟ことに結びついていた時代は終わったのだ。

最近は、フリーアルバイターという人種が現われたり、若い寮生たちが豪華な3ナンバーの車を乗り回す光景が見られる。彼らにとって仕事はもはや生きるためのものではなく人生を楽しむための手段になっているのではないか。

若い世代にとって、時間は給料と同じくらい大切なものになっている。彼らは食えるだけあれば、あとは自分の時間に好きなことをやる。金のために時間を犠牲にするなどという古くさい発想はないのだろう。

そこで会社内では、しばしば上司と衝突することになるが、私は若者たちの考え方を否定したくない。経済大国と言われるまでになった今、企業が働く人に合わせる、という新たな発想の経営展開が必要になってきているのではないか、そのためには経営者はもちろん、中間のオジサン達も自らの意識改革が必要だ。

本当はオジサンたちの方が時間に飢えているのかも知れないのだから。

その意味では、昨今急速に広がりを見せている〝フレックスタイム〟は良いインパクトになりうる

し、全体としての労働時間短縮の動きは社会全体のテーマといえる。

「一つの提案」

ここ何年か前から人手不足という問題がクローズアップされている。経済の成長過程では当然だし、サービス産業の人気の高まりから、とくに製造会社では厳しい状況で、今後もその流れは変わらないだろう。

そこで、一つの案として、若い主婦層の労働力を活かす方法を考えてみたい。

女性のパートといえば、その大半は子供の手のかからなくなった世代、つまり中高年の人たちだ、そして、パートとはいえ正社員とほとんど同じ時間帯で働いている。オバサンたちは時間がたっぷりあるのでそれでよいし、企業の側でも、高令者ほど午後の作業率は低下するが、何せ人が足りないのだからしようがないというのが現実だ。

一方、ちがった角度から見ると、子供を送り出してから帰るまでの十二時か午後一時までなら働きたい、と思っている若い主婦は結構いる。しかし、そういう人たちの多くは内職というかたちでしか仕事ができない。

子供の洋服くらい……と思って家でコツコツ仕事に励むが、内職の工賃は非常に安い。時間がネックになっているので何ともしようがないのだ。

そうした若くて作業効率のよい、しかもコストの安い人たちの力を取り入れることは、企業にとっても大きなメリットとなるはずだ。

そこで、午前中だけフル稼働する工場を作るというのはどうだろう。

当然、スペースや設備、その稼働率といった問題点もあるが、若い人が午前中の四～五時間集中して作業することを考えれば、仕事の中味によっては十分採算はとれると思う。

これまでは、企業の論理が優先しがちであったが、これからはそうばかりも言っていられない。働く人の都合や個性に合わせた経営をする企業のみが発展していくのではないか。

都合のよい時間に働くことができる環境が整えば、労働人口は増加し、その結果、個々人の労働時間短縮への道も開けるように思う。

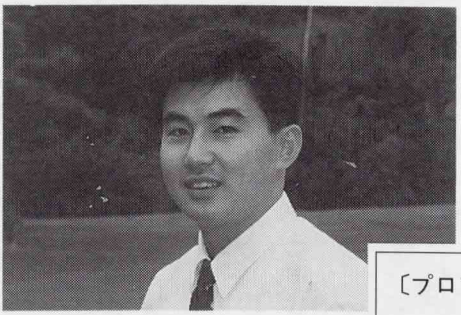
また、そのことは家族としての収入の増加をもたらし、それが男性の労働感にも影響を与えることで、社会全体がもっと余暇を楽しめることにつながればなおさらよい。

いずれにしても、世に言われているほど豊かになったという実感がもてないのは、まだまだ時間的なゆとりが少ないからで、そのことをいろいろな角度から考え直してみてもよい時期にきていると思う。

技術の進歩や、企業の発展は他でもない、私たち自身の人生を豊かなものにするために役立つべきものなのだから。

私の進化論

日本電装労働組合　執行委員
小　西　正　晃



〔プロフィール〕

小西　正晃（30歳）

- 1961年　和歌山県生まれ
- 1983年　日本電装㈱入社
  ガソリン噴射技術部にてＥＦＩの
  燃料系部品の設計
- 1990年　日本電装労働組合執行委員
  現在に至る

〈モットー〉　死ぬまで元気に生きる
〈家族〉　妻，長男，長女

小学生のころ感じたこと

子供のころ、確か小学校の高学年になったころだったと思うが、なんと言っていいか分からない不思議な感じを受けた事がある。それは〝宇宙は果てしなくひろがっている。〟ということについて考えはじめた時である。

宇宙の果てまで進んでいくとどうなるのか。宇宙の向こう側にはまた、無限の宇宙空間がひろがっている。とすれば、終わりのない空間とはどんなものか。考えれば考えるほどわけが分からなくなってくる。

これは三十才になった今でも、やはり同じである。ふだん有限な三次元空間のなかで生活している私たちには、とうてい感覚的には理解できないものかもしれない。

中学生のころ考えたこと

中学生のとき、理科の先生から「いま夜空に見える星の光は、実際は何年も前にその星を出発した光である。だからいま輝いて見えている星も、ひょっとしたらもう消滅してなくなっているかもしれない。」という話を聞いて、考えたことがある。

太陽からの光が地球に届くまでには約八分かかる。地球上で太陽の表面を観測すれば、それは八分前の太陽の姿ということになる。

アンドロメダ大星雲は二百万光年以上のかなたにある。仮にどんなに遠くても見ることができる望

遠鏡があったとして、その望遠鏡を使えば、二百万年以上も前のアンドロメダの星ぼしを、二十世紀のいま直接見ることができる。

それでは逆に、この高性能望遠鏡を使って、宇宙から地球を見たらどうなるか。アニメの「宇宙戦艦ヤマト」のようにワープ航法で瞬時に空間を移動する手段さえあれば、昔の地球の姿を見ることができるのではないか。

太陽の光を受けて、たとえば三百年前に地球を出発した光は、現在三百光年先の宇宙空間を進んでいるはずである。「ヤマト」に乗ってその地点まで先回りし、そこから日本を望めば、望遠鏡の中に飛び込んでくるのは三百年前に日本を出発した光であるから、目の前に映し出されるのは三百年前の日本の姿、すなわち江戸時代の日本である。同じように六千万光年先回りしてみれば、恐竜絶滅の謎が解けるだろうし、さらに四五億光年先まで行けば、地球誕生の瞬間を実際に見ることができるかもしれない。

また、光は連続的につながっているのだから、光より速いスピードで地球を離れながら、望遠鏡を覗き続ければ、フィルムを巻き戻した状態の光景が目の前に展開されるのでは……

といったことを考えた。現実には、そんな高性能の望遠鏡や高速度の乗物などあり得ないと思いながらも、空想は果てしなくひろがっていった。

高校・大学生のころ知ったこと

高校のときの私の好きな科目は物理だった。その物理の授業ではニュートン力学を教わった。そし

て大学生のとき、本屋でアインシュタインの相対性理論に出会った。もっとも興味をひかれた点は、相対性理論によれば、普段わたしたちが不変のものであると感じている時間の流れや空間も、のびたり縮んだりすると書かれてあったことである。

その相対性理論の基礎となる原理の一つに、光速度不変の原理がある。「光の速度は、慣性系で観測する限り、真空中ではつねに、一定の速さcで進む」という原理である。

これは学校で習うニュートン力学の速度合成の法則とは相容れないものである。たとえば一定速度vで進んでいる宇宙船から、その進行方向に発せられた光の速度cを、静止した地上から観測した場合、ニュートン力学によれば、地上で観測される光の速度はc＋vとなるはずである。しかしこの場合でもその速さはやはりcであるということであり、「速度はたし算」という〝常識〟を否定することになる。

過去、多くの科学者が、地球の自転や公転運動が、光の速さにどのような影響を与えるかを調べた。しかし実験の結果は、科学者の予想に反して、光はいつでも同じ速さであるというものであった。この結果は当時の〝常識〟を持った科学者たちをおおいに悩ませた。そして同じ〝常識〟を持っていた私も、これを読んでおおいに戸惑いを感じた。

また、光速度不変の原理には、「光は自然界でもっとも速いものであり、それ以上のスピードで物体を動かしたり、信号を伝えたりすることはできない。」という主張がふくまれている。これも高校生のとき馴れ親しんできたニュートン力学の基礎式$F = ma$と矛盾する。

ニュートン力学では、たとえばロケットに力を加えて加速しつづければ、ロケットはどんどん速く

なり、いつかは光速をこえるはずである。ところがそのようなことは決しておこらない。

現在では、シンクロトロンなどの巨大な粒子加速器を使って、電子、陽子などの素粒子を加速して衝突させ、素粒子の究極の法則をさぐる実験が行なわれているらしいが、そのような実験でも、素粒子は光速の九九%以上まで加速されるが、どんなに大きな力を加えても光速には至らないことが確認されている。

なぜ自然界において光速が最大速度で、これをこえられないのか？　不思議なことである。しかし事実がそれを証明している限り、中学生のころ考えた「光を追いこして、過去の世界を見る」という夢は、また一歩、空想の世界にはいり込んでしまうことになる。

三十才になった今思うこと

ニュートンは、リンゴが木から落ちるのを見て、万有引力の法則を見つけ出したと言われている。ふつうなら〝あたりまえ〟と片付けられてしまう現象である。

現在では、地球が動いているということは〝常識〟であり、これに異論を唱える人は、ほとんどいないだろう。しかし、中世ヨーロッパでは、コペルニクスの地動説など、当初はだれも信じなかった。それは天動説が当時の〝常識〟であったからである。

小学生のころ、〝宇宙には果てがない〟と聞いて不思議に思った。限りある空間の中で生活し、それを〝あたりまえ〟と感じているあいだは、無限の空間など思いもよらないことである。

中学生のころ考えた夢は、〝光速をこえることはできない〟という〝常識〟によって、それ以上ひろ

がっていかなかった。

私は、自分自身をどちらかと言えば〝常識〟的な人間だと思っている。三十年間にいろんな経験と知識を得るとともに、先入観念や既成概念といったものも身につけてきた。〝常識〟を知識としてもっていること自体は、大切なことであるが、それを〝あたりまえ〟と思った時点で、そこからは何も新しい発想、好奇心は生まれてこなくなる。

今、三十才。これからが人間形成仕上げの重要な時期と感じている。あたりまえのことをあたりまえと片付けず、常に好奇心をもって、物事を見る目をやしなうこと。これが私の課題だと思っている。

そしてこれから

サバンナ地帯で多く動物が草や木の枝に茂る葉を食べて暮らしている。その中にやや首の長い子が生まれた。その子はほかの動物より高い枝の葉を食べることができる。ほかの動物と競争しないから、食糧を有利に獲得することができる。つまり環境への適応力が高いというわけである。もっと首が長くなれば、ほかの動物が食べることができない高い木の枝の葉を独占することができるから、さらに有利である。こうして、より首の長い個体が生き残り、その素質が子孫に受け継がれた。それがいまのキリン、というわけである。

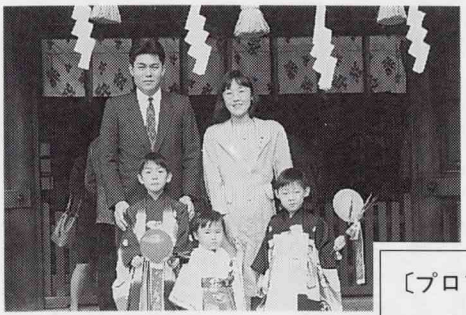
環境に適応するために進化し、そして繁栄していく。キリンの首はなぜ長いか。ダーウィンの進化論で説明すると、こういうことになる。

私は技術者として会社に入り、何のめぐりあわせか、今は組合の専従役員をやっている。仕事上の

環境が大きく変わったわけである。これは私にとって、今までなかった面を進化させるには、絶好のチャンスである。このチャンスをいかさない手はない。これからもずっと進化しつづけていきたい。

弱者の視点から，世の中を見て

トヨタ自動車労働組合
高　橋　恭　弘



〔プロフィール〕

高橋　恭弘（32歳）

- 1959年　横浜生まれ
- 1981年　トヨタ自動車㈱（旧トヨタ自工）入社
  人事部にて，採用・個別人事等の人事管理業務を経て
- 1990年　トヨタ自動車労働組合へ専従出向（企画部長）

〈モットー〉　一期一会
〈家族〉　7人家族（両親，妻，息子3人）

一　はじめに

当原稿を執筆するにあたり、私の身の回りで、相次いでアクシデントが起こりました。個人的な事例で申し訳ありませんが、その事例二つをキーとして、思うところを述べてみます。

二　祖母の死と福祉について

九月二十一日祖母（八十三歳）が、娘や多くの孫に見守られながら、この世を去りました。親族の誰もが、身内の死を悼む気持ち以上に、祖母の波乱と苦労に満ちた人生と、病気を克服した晩年の生きざまを深く思い起こし、悲しみに暮れておりました。

と言いますのも、祖母は終戦後、朝鮮から夫の郷里である岐阜へ引き上げてきたのですが、祖母は昔で言うインテリ出身であり、箸より重い物を持ったことが無かった人が、引き上げた日から、鍬を手にして農作業に出ることを余儀なくされました。しばらくして、最愛の人を失い、また姑にいびられながら、慣れない農業をこなして幼い娘四人を女手一つで育てなければならない境遇に突き落とされたのであります。

幾多の苦労を経て、娘四人は嫁ぎ、それぞれが幸せになり、余生を楽しく過ごそうかとした矢先に、祖母は脳溢血で倒れました（当時七十一歳）。植物人間のような祖母を前にして、誰もが死を覚悟した状態でありました。

しかし、その後、右半身不随の状態ながら、見ている方が心痛くなるほどの、苦しいリハビリを通

して、運動機能を一つひとつ回復させていきました。約二年をかけてのリハビリの結果、倒れた当初誰も想像しなかった、車椅子で日常生活上の身の回りのことは自分で出来るような状態にまで、見事に回復をしたのです。食事・着替え・用便は勿論、読むことも、話すことも、左手で書くことも、出来るようになり、その後、亡くなる迄、約十年間回復した状態で過ごすことが出来ました。

祖母と同様に脳溢血で倒れた人が、リハビリのつらさに耐えきれず、常時介護が必要な状態で、衰弱していくことと比べましても、奇蹟的な回復を支えた祖母の忍耐強さ・精神力・絶ゆまぬ向上心には敬服するばかりであります。

そこで、祖母は一体何を心の支えとしたのだろうか、と考えてみました。

まず、植物人間の状態から初期に回復した時点では、「生きる」ことへの執着であったでありましょう。それも、戦争という激動の時代の中で、自分というものを捨て去らなければならない程の数多くの苦労があっただけに、その執着心は人一倍強かったと思われます。

次に、きついリハビリに耐えて徐々に回復していた時期はと考えますと、当然のことながら、懸命に看護した親族の愛情という要素が大きかったに違いありません。しかし、それだけでは自分に対して甘くすれば、他の例で分かる通り、寝たきり老人になってしまったでありましょう。やはり、親族の深い愛情に加えて、「人に多くの迷惑をかけずに、もう一度、皆と一緒に楽しく暮らしたい」という、強烈な自立心があったという事を見落とすことは出来ないと思います。

ここで思い出されるのは、産政塾の第六回で木原孝久氏に講話いただいた「福祉のあり方」の中の、『チャリティー福祉でなくフェアネス福祉を目指せ』『福祉にとって必要なものは自立』であります。

今回の祖母の例は、老人福祉の姿という単純なものではなく、置かれた立場で何をすべきかを考え、自らの不自由さを自らで克服していこうという意志を持つということが前提になければ、福祉社会は成立しないということを、瀕死の病人であった祖母が証明したものと考えます。

そうした点で、木原孝久氏が言われる通り、福祉に対する考え方が、日本の場合は上から、つまり強者からの施し（チャリティー）という考え方が強く、また「○○○のハンディを乗り越えて」というマスコミの捉え方を見ましても、ハンディキャップをつける風土がなく、苦言となりますが、過保護な扱いをしている、と思います。

「モラトリアム人間の時代」の著者で、精神医学の立場から社会批評をされている、小此木啓吾氏の『1・5の時代』という本の中で、情報化社会と呼ばれる現代において、人間としての健全な心の発達が阻害されつつあると警鐘を鳴らしています。

簡単に言いますと、2・0で表す二者関係とは、一対一の人と人との人格的な関係であり、愛と憎しみの相剋を克服しながら、お互いの関係を発展させていくものであります。しかし、テレビ・コンピューター・ファミコンの出現は、その高度な擬人的な応答性によって、0・5だけ人間的であるという錯覚的な関係を増大させています。しかも、1・5の世界では、相手の感情や人格に配慮することなく、徹底的に自分本位にあるという利点により、現代人の精神生活の領域の全てに拡がっているものである、という内容であります。

こうした精神構造が拡大していく社会の中では、健全な「自立性」が失われていく危険性は極めて高く、ますます過保護状態になっていくと思われます。小さい時代から「1・5」の関係で育ってい

る子供たちの事を思いますと、恐ろしいものであります。このように自立性が未熟になっていく現代人に対して、今後の日本の福祉はどうあるべきか、大きな課題であると思います。

三　妻の入院と弱者の立場

もう一つの個人的な事例をあげますと、妻が突然倒れ、入院したことであります。その日から、六、四、二歳の息子を抱え、まさしく「クレイマー・クレイマー」の世界に放り込まれました。

入院中の妻や三人の息子たち、さらに互いの両親に大きな不安を与えることなく、またこれまで妻に依存していた部分が強かった、親としての子供に対する愛情を欠くことのないように、そして妻や子供の世話をお願いする互いの両親へ心配りをしながら、どのようにして日常の生活を営んでいくか、頭の痛い毎日であります。

そうした中、ある日、上の息子二人（三男は妻の実家に預けていた）と、いわゆるファミリーレストランで夕食をとりました。三人で食事をしていたある瞬間、息子二人が急に黙って、隣のテーブルをじっと見つめていたのであります。そこには、私と同世代の夫婦が二人の子供と楽しく笑って食事をしている姿がありました。妻の入院前は我が家もそうであり、当たり前と思い込んでいた、家族の楽しい団らんの光景と、それを食い入るように見ている息子二人の恨めしそうともとれる顔を見比べた時、母親のいない生活の寂しさを、普段は口にこそ出して言いませんが、それにじっと耐えている幼心を思うと、胸が締めつけられる思いで一杯でありました。

息子たちの寂しげな表情を見ていると、不幸にしてそうした境遇になってしまった方々の気持ちを

考えずにはいられません。伴侶を失う、子供と死別する、親を失うなど、そうした深い悲しみを常に背負って生きている方々が数多くおられることを、改めて痛感いたしました。

それでは、そうした境遇の方々に対する福祉とは何かと考えてみますと、先ほどの観点で言えば、悲しい境遇を乗り越えていく「自立性」が求められるわけでありますが、フェアネス福祉の観点から見ましても、その「自立性」を支え、バックアップする、周りからの暖かい愛情がなくては難しいものと考えます。

そして、それは企業内での暖かい対応のみならず、社会全体からの愛情が必要であると思います。多くの会社が、基本的な考え方として、「人にやさしい企業づくり」を目指しておりますが、今後は弱者の視点をもっと採り入れた「人にやさしい社会づくり」が一層求められている時代であると思います。

四　おわりに

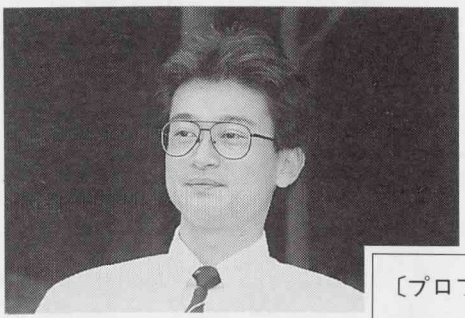
「組合活動の原点は職場にある」と言いますが、職場＝仕事を支えるのは家庭であります。そうした点で、今後の労働運動は、労働者というだけでなく、生活者・家庭人・地域人という視点も必要であるとして、運動の枠を広げております。そして、民社党が早くから唱えてきた、福祉社会の構築も急がなければなりません。

そうした中で、具体的な活動を進めるにおいては、現代社会人に固有な「1・5」の精神構造を前提としながら、つまり「自立性」が希薄になっていく事を基本として、一方で弱者の人にも十分な配

慮と暖かさが感じられるようにしていかなければなりません。特に精神構造の変化は、人に対する基本的なやさしさ・思いやり・愛情を喪失させていくことになり、また学校教育・家庭生活・会社生活などの全般に影響が及ぶことが予想されますので、人にやさしい社会づくり、真の福祉社会を構築していく上において、新たな対応が必要であると考えます。

「夢」について

豊田合成㈱　人事部
種　市　　章



〔プロフィール〕

種市　　章（29歳）

- 1962年　三重県四日市市に生まれる
- 1985年　豊田合成㈱　入社
  稲沢工場配属（工務課，品質管理課，製造技術課）
- 1990年　人事部労務課
  現在に至る

〈モットー〉　なんとかなる
〈家族〉　妻

今回、第二回産政塾閉塾にあたって、第一回につづき、「本」を作成するということであります。「本」を作成するということに対して、個人的には、嬉しく思っています。というのも、学生の頃より、「小説を書いてみたい。」という思いがあったからです。

では、学生の頃、思い描いていた「小説」の内容はどういうものかというと、一言でいうと、前半は「ユーモア路線の青春物」で進み、一転して後半は、「シリヤスなハードボイルド路線」となり、最後は「胸が痛むような結末」というものであります。具体的な内容については私の頭の中では、既に出来上がっているので、「いつの日か、皆さんにその内容をお知らせできれば」と思っています。ちなみに、「小説」を書いた後はどうなるのかというと、これもまた、私の頭の中では、既に出来上がっており、私の書いた「小説」は、な、なんと、芥川賞を受賞してしまうのであります。そして、その余勢をかって、角川文庫より映画化、もちろん主演は私であり、共演は原田知世、また、この映画の主題歌はオリコンのヒットチャートを急上昇し、主題歌を歌う私は「ひっぱりだこ」と、私の妄想はとどまるところを知らず、膨らんでいくのです。

ところが、現実はというと、バブル経済と同じように、私の妄想も大きくなりすぎて、「バァーン」とはじけ飛んでしまい、今はしがないサラリーマンです。けれども、まだ私の心の中には、ほんの少しだけでありますが、学生の頃の「小説」の思いがくすぶっており、「実現できればなぁ。」と思っています。

そのためには、まず第一に「本を読まなければ」と思います。学生の頃は、往復四時間という通学

時間を利用し、本をかなり読みましたが、社会人になってからはというもの、まったくと言っていいほど読んでいないため、今後は月一冊を目標に本を読んでいきたいと思います。

そして次に、「もうすこし広い視野を持たなければ」と思います。今まで、工場畑で新製品の生産準備の仕事をやってきて、「製造会社は生産部門が柱である。」と思い、自分の仕事が会社に対して、多大に貢献していると自負してきました。しかし、昨年の十二月に人事部へ異動してきて、その考えは若干変わりつつあります。すなわち、「確かに、製造会社において生産部門が柱であるが、それをサポートしてくれている部門があるから柱として成り立っているのでないか。」と、思うようになってきました。具体的に言うと、工場にいる時は給与とか労働条件等を会社（人事部）が向上・充実させていくのは当たり前のことだと思っていました。そして、これらを不手際なく実施していくのは、当然のことであり、もし、不手際があろうものなら、「いったい何をやっとるのだ、本社の連中は。」という目で見てきました。（本音を言うと、工場にいた時は、自分たちは豊田合成の看板を背負って新製品の開発・歩留り向上を実施し、本社の連中の給料まで稼ぎだしているつもりでいました。）ところが、いざ逆の立場になってみると、はたから見ている以上に大変で、気をつかうものであり、本社の人達がいなければ組織がうまく回っていかないことがよくわかりました。今まで「当たり前」と思っていたことをやるのも大変なことだと思うようになりました。私は、工場在籍時、三つほど所属を変わってきたので、その点は結構わかっているつもりでしたが、今回あらためて認識させられました。「まだまだ自分は、青いなぁ。もっともっと視野を拡げていく必要があるなぁ。」と痛感しました。今後は、いろんなことに対し、見る聞くだけでなく、積極的にやっていきたいと思います。

そして最後に、「もっと人間的に大きくならねば」と思います。具体的にはどういうことかと言うと、いろんな人と出会い、その人のいいところを吸収していかなければということです。今までの自分は、どちらかというと「井の中の蛙」であり、そういう意味で、今回の人事部への異動を自分にとっていい意味での転機にしたいと思います。また、ただ、いろんな人と出会うだけでなく、本音で話ができることが大切だと思うので、今後は、月一回を目標に「飲み会」なんかを実施していきたいと思います。

さて、そんな折りも折り、今回の産政塾に参加する機会に恵まれました。まだ、人事部へきたばかりの私にとって、社内はもちろんのこと、ましてや社外の人なんかを、知る余地もないのが実情です。ところが、幸運にも今回の産政塾に参加することができ、いろんな人と知り会い、いろいろな情報を得られたということは、大変プラスになりました。

というのも、人事部にきた当初、あまりにも漠然とした仕事内容にとまどってしまい、「自分がやっていることは会社、しいては従業員のみんなのためになっているのだろうか。」という疑問にかられてしまったというのが本音なのです。工場での生産準備の仕事というのは、サイクルタイムが○○秒で、歩留り率は○○%とハッキリ決まっており、それを目標に進めていくというものでありました。ところが、人事の仕事というのは、「職場環境を良くしたい」というようなものであり、「じゃ、具体的にどれをどのようによくしたいのか。」というのを定量的に表すのが難しいものがほとんどです。これにともない、仕事の成果・結果という面から見ても自分がやってきたことに対して、結果的に効

果があったのかなかったのかということが、非常にわかりにくいという面があります。このため自分が今やっていることに対し、「正しいのか、そうでないのか」がはっきせず、「本当にこれでいいのだろうか。」という悩みにかられる毎日でありました。

このような時に、出会ったのが産政塾の面々であり、いろいろな講義をしてくださった先生方であります。この産政塾で講義してくださった先生方はというと、決してその道での有名人というわけではありませんでした。(私が知らないだけかもしれませんが)けれども、先生方の講義から、それぞれが草の根的な活動を実施し、少しずつでも「社会福祉・社会貢献」を進めようとしていることがよくわかりました。そして、こういう草の根活動を「誰か」が進めて、少しずつでも大きくしていかなければならないことがよくわかりました。今までは「みんながやっているから、自分ひとりがやっても大勢に影響ない。」と思い、空き缶等をポイと捨てていたけれども、今後は何事に対しても「自分がやらなければ、誰がやるんだ。」という心意気でいきたいと思います。そして、もう一つ思ったことは、先生方それぞれの考え方、活動の仕方は異なっているけれども、その根底には、いつも「社会福祉・社会貢献を進めよう」という大きな流れがあることがわかりました。

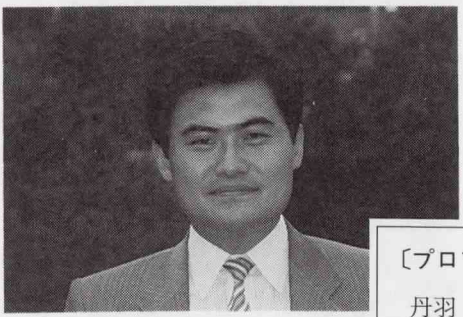
今回の産政塾を通して、今までかかっていた霧が、少しずつであるが晴れてきたように思えました。ハッキリとした目標に対して、仕事を進めるというやり方もあるが、自分のやっていることを信じて仕事を進めるというやり方もあるということが、なんとなく理解できるようになってきました。というよりも、自分のやっていることを信じていかなければ、やれない仕事もあるものなのだということ

が、なんとなく理解できるようになってきました。社会福祉・社会貢献を進めている先生方と同じように、私も一つ一つ、一歩一歩、漠然としているけれども、大きく、そして重要な目標に向かっていきたいと思います。「豊田合成を良くするんだ。」という確固たる信念を持って。

そして、ある時、ふと後ろを振り返ってみたときに、「以前と比べると、豊田合成は良くなったなぁ。」という声が、まわりから聞こえてくることを夢見て……道のりは遠いけれど！

「国際人・日本人・産業人・社会人と企業人」

中部電力㈱　人事部
丹羽　漸



〔プロフィール〕

丹羽　漸（29歳）

- 1962年　名古屋市生まれ
- 1984年　中部電力㈱　入社（浜松営業所）
  岐阜支店労務課（人事・教育）
  本店人事室（採用）を経て
- 1990年　本店労務部労務課
  （組織改定により現在は人事部労務課）
  現在に至る

〈趣味〉　野球観戦（熱狂的ドラキチ）
天体観望

一　一期一会

一月からはじまった産政塾も閉塾式を迎えた。産政塾では松下政経塾への体験入塾に始まり、青年海外協力隊員の体験談、現場での活きた活動から「福祉」そして「企業の社会貢献」を考えさせられた玉川先生、木原先生のお話まで、日頃の会社での業務では直接聞くことのできない話を聞くことができ、私としては貴重な半年間であった。また、先生を囲んでの夜の席は、先生とお話しするというよりも異業種しかも労使それぞれの立場の方との懇談の場であり、考え方から仕事のやり方まで、会社が違うとこうも違うかと感じることも多かったが、いろいろな意見交換をすることができ、先生方のお話にもまして楽しい貴重なひとときであった。

「一期一会」―よく言われる言葉である。実際のところ、今、各会合で先生方が何を言われたのか、自分なりにポイントとして感じたこと以外あまり覚えていないが、産政塾のメンバーの名前と顔と会社名はちゃんと覚えたつもりである。私にとって、このことが今回の産政塾で得ることができた最高のものである。これを機会に今回の産政塾のメンバーとは今後とも気軽に、また、フランクに交歓を続けていけたらと思っている。

二　国際人・日本人・産業人・社会人

今あらためて塾生募集のパンフレットを見返してみると、今回の産政塾のねらいは、「来る二一世紀を臨むにあたり、・国際的な視野に立ち、・日本国のサイズで物事を発想し、判断でき、・日本の

将来のビジョンを抱き、・産業人・社会人の立場でそれを実行していくリーダーとしての資質を向上させ、・日本の将来づくりに産業人の立場で参画しようと意欲を持つ若者が集う、現代の道場を作ること」とある。いわば現代は、国際人・日本人・産業人・社会人の四つの人たることが求められており、こういう人を育てるという訳である。

産政塾へのお誘いを受けたとき、私はこの「ねらい」を読んで久しく忘れていたものを思い出したように感じた。

狭い下宿で、生協コープウィスキー（その当時は、サントリーホワイトの値段でオールド並みの味がすると思っていた）を飲みながら、親友（類は友を呼ぶのか、役人になった奴はいない）と夜が白むまで語り明かした学生の頃を思い出した。その頃の話題は、「ソ連の脅威と日本の安全保障」（ソ連の民主化などと言っている今思えば、真剣にソ連からミサイルが飛んできたら等と議論していたことが面白い）とか、「憲法第九条と非武装中立論」（自衛隊違憲論議などどこかへ消えてしまって、自衛隊をＰＫＯへ派遣することの是非が新聞等で論じられる世の中になってしまったが……）「日米貿易摩擦と日本のとるべき道」（その当時は、アメリカが買ってくれなくなったらどうなるだろうというレベルでの話であった）「選挙と政治について」（参院に比例代表が導入される時期で、選挙制度のあり方や日本の政治と社会の特質、西欧文化と政治社会の比較などよく勉強して論じあった。今でも松下政経塾の塾生を相手にしても十分議論できる自信がある）「死刑の是否」（これだけは今も古くて新しい問題である）など。

学生時代の私は、「国際的な視野に立ち、日本国のサイズで物事を発想し、判断でき、日本の将来の

ビジョンを抱いて」いたし、国際人であり、日本人として物事を考えていたように思う。そして、就職し、産業人となり社会人となった。

しかし、今の自分をあらためて見つめ直してみるとどうだろうか。そういえば、就職して約八年、学生の頃のような話題で語り合うような機会は一度もなかった。会社での話題は当然ながら業務の話であり、生活の話題である。選挙においては、理想・理念はどこへやら、現実のみが押し付けられる。学生時代の友達と会う機会も少なくなり、会ったとしても話題の中心は、自分の仕事、会社、生活の話であって、特に結婚する前後は相手の話でもちきりだった。

少なくとも今の自分は国際人として、日本人としての視点で物事を考えることは少なくなってしまっている。さらに、自分の仕事にしても、日々の忙しさにかまけて産業人としての視点を忘れがちになっているのではないか。また、結婚して自分たちの家庭生活に目がいくあまり、社会人としての視点を失っていないか。

産政塾は、そのような自分が忘れていた視点を思い出させてくれる機会であり、視野を広げる意味で私の期待を裏切らないものであった。

三　企業人と夢

しかし、産政塾の会合を重ねていくうちに、私はあることに気がついた。

それは、産政塾の会合では、私は他のメンバーの皆さんから「中電さん」としばしば呼ばれ、また私も、他のメンバーの皆さんを「トヨタさん」とか「電装さん」とか知らず知らずのうちに企業名で

呼んで、そのことに何の違和感も感じなくなっていること、夜の場で自由な意見交換をしていても「中電」の看板を背負っているという意識はしっかりあって、その企業の枠の中で物事を考えることが習慣となってしまっており、枠にとらわれた発想・意見しか出てこないということ、そして、産政塾での議論は、学生時代の議論とは違って、何か熱くなるものがないということであり、すなわち、私を含めてメンバー全員が優秀な「企業人」であり、「企業人」としての殻ができてしまっていてそれを破ることができなくなってしまっているということであった。

産政塾の「ねらい」は、そうした「企業人」から脱却し、「国際人・日本人・産業人・社会人」となることにあったはずなのに、企業の枠の中で世界を政治を産業を社会を考えているにすぎない「企業人」たる自分を発見したとき、私は何となくむなしいものを感じてしまったのである。

現代の日本社会は「企業社会」といわれ、男性サラリーマンはその働く企業にアイデンティティーを持っていると言われる。また、「終身雇用制」や「企業別労働組合」の制度は日本独特の制度であるとともに、「企業社会」を支え、サラリーマンのアイデンティティーを企業に持たせるシステムとして分析されている。現代の繁栄は、こうした「企業社会」と「企業人」が生み出したものであり、しかし、一方で、現在の日本の政治状況を作り出し、国際社会における批判につながり、かつ、社会の歪みを生じさせてきたということも事実である。

この「企業社会」を「タテマエ」と「ホンネ」という軸で分析するならば、「ホンネ」の社会ということができる。昔から日本社会は「タテマエ」と「ホンネ」の微妙なバランスのうえに存立してきた。現代のさまざまな問題は、この「タテマエ」と「ホンネ」のバランスが崩れ、社会の振り子が「ホン

ネ」ベースへ振れていることに起因するようにも思われる。

このことを個人の次元に置き換えると、「企業人」は「ホンネ」の存在であり、「国際人・日本人・産業人・社会人」は、「タテマエ」の存在ということができ、自分自身も含めてその振り子が「ホンネ」ベースへ振れているといえる。これからの時代を担っていく者に求められるのは、「企業人」としての「ホンネ」と「国際人・日本人・産業人・社会人」としての「タテマエ」を調和させる微妙な「バランス感覚」ではないだろうか。

「企業人」としての存在を止揚し、「国際人・日本人・産業人・社会人」としての存在とうまく調和のとれた「バランス人間」になることが私の理想であり、夢である。

しかし、それもいわば「タテマエ」であって、小学生の頃、望遠鏡で夜空の星を見ながら思っていた宇宙旅行の夢と同じくらい、実に道程は険しく先の長い大きな夢というのが今の「ホンネ」である。

四　電力会社にご理解とご協力を

ところで、夢から現実の「企業人」に戻るが、産政塾の会合を通してメンバーの皆さんから、私「中電さん」に対して最も多くあびせられた質問は、「今年の夏の電気は大丈夫でしょうかねぇ」というものだった。私は「中電は今年は大丈夫だと思いますが、夏の暑さによっては東京は危ないかもしれませんよ。出張なさるときにはお気をつけて」などと半ば冗談も含めて答えていたが、中部でもこの夏もしかすると「トヨタさん」や「電装さん」に電力カットをお願いすることもあるのでは、と本心では心配していた。

おかげさまで、冷夏であったことや景気の動向なども幸いして、この夏はなんとか乗り切ることができたようである。しかし、来年のことを聞かれると、冗談など言っておれないというのが当社の実状である。

『原子力発電と発電所の建設に一層のご理解とご協力を、電力会社に皆様のご理解とご協力をお願いいたします。』

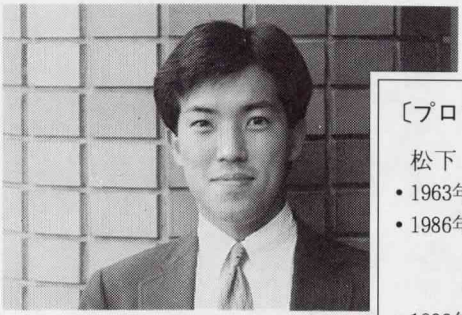
「企業人」として、「電力マン」として、これが今の偽らざる気持ちである。

五　最後に

最後に、産政塾事務局及び忙しい中を快く会合に送りだしてくださった上司と同僚、そして、雑文でも自分の所感を書きとどめるスペースを与えていただいたことに対し心から感謝し、ペンを置きたいと思う。

企業と社員のいい関係

日本電装㈱　人事部
松　下　恭　規



〔プロフィール〕

松下　恭規（28歳）

- 1963年　三重県生まれ
- 1986年　日本電装㈱　入社
  人事部教育課にて事務・技術職の教育企画を担当
- 1989年　人事部企画に異動
  （現在　労務課に組織変更）
  賃金・諸手当を中心とした人事制度企画を担当

〈モットー〉　単純な心で複雑な人生を味わえ
〈趣味〉　草サッカーで人一倍ユニフォームを汚すこと
みんなに喜んでもらえる企画を練ること

会社に入って五年半になる。幸い仕事面でも人間関係面でも非常に恵まれた環境にあり、会社の中でも生き生きと仕事をやれている方ではないかと思う。しかし最近になってふと不安になることがある。これだけ会社の中にどっぷりと浸って生活をしていると、一歩会社の外に足を踏み出した場合に一社会人として通用するのであろうかという点である。

一　イエ・ムラ化した日本企業

終身雇用を前提とする現在の日本の企業社会では、企業が一つのイエやムラのような存在となっており、その中で企業（経営者）と個人（社員）がお互いに寄りかかって生活をしているように思われる。この関係は高度経済成長期のように企業も個人も一つの同じベクトルのもとで行動できた時期には非常に大きな力を発揮した。おそらくこのような企業が多かったからこそ、戦後急ピッチでの復興・発展ができたのであろう。

しかし、経済の成長が低位安定し、ビジネスの国際化が急発展するなど企業を取り巻く環境が大きく変わってきた現在では、この企業のイエ・ムラ化はその弊害の方が目立っているきている。まずは最近マスコミを騒がせている金融業界を中心とする不正取引の問題。これは「会社のために……」という社員の意識が、一市民としての良識を上回ったために発生した問題である。多少の行き過ぎはあったにせよ、自分のイエ・ムラを守ためにとった社員の行動は、ただその事象だけを非難することでは済まされない大きな問題である。次にこのイエ・ムラ化が定着した企業が海外進出した場合にも、さまざまな問題が生じている。日本から渡った社員は当然のように社外には目を向けず、また企業も

その地域に対して無関心であることが多かった。そのため日本企業は地域への貢献度が低いとの声をよく耳にする。

日本の経済がこれだけ大きくなり、企業の活動も国際的規模の広がりを見せている現在、かつて我々がＩＢＭなりＧＭなりを注意深く眺めてきたのと同じように、日本企業は海外からその行動を見守られる存在になった。その中で、日本の企業も社員もいつまでも自分たちにしか通用しないイエ・ムラの論理を振り回すのはたいへん危険ではないだろうか。

二　カムバックホーム・カムバックコミュニティ

それでは、日本企業がこのイエ・ムラ化から脱却し、真の国際的トップ企業となるには何が必要なのか。その多くの鍵は、企業ではなく社員が握っているように思われる。というのも、経済が高度成長期から低成長期に移行する過程において、企業は利益第一主義からの転換を迫られた。そして社員の幸福を実現させていかないと企業の発展もないことを企業が気づき始めたはずである。それにより週休二日制の浸透やフレックスタイムの導入を進め、社員の生活にゆとりを持たせようとしてきた。しかしながら、自分の時間を与えられたはずの社員たちが一向に会社べったりの意識を変えないために、相変わらず日本企業はイエ・ムラ化したままなのである。

以前読んだ本の中で、ヨーロッパ人の生活パターンについて書かれた一節があった。それによると、彼らの生活は〝市民〟として果たすべき義務に従って構成されている。一つは職業人としての義務であり、それぞれの職業において契約上の責任を果たすことである。二つめは家庭人としての義務であ

り、職業人としての義務を遂行した後は家庭に帰って妻子とともに円満にして心豊かな家庭生活を営み、子女を訓練すること。三つめは、それぞれの個人として地域社会と国家に奉仕する義務である。そしてこの三つの義務をバランスよく果たさないと、人は〝市民〟としての資格を失うとあった。

これを現在の日本企業の社員に当てはめてみるとどうであろうか。我々は一つめの職業人としての義務を果たすことだけに精一杯で、家庭人としての義務も地域社会や国家に奉仕する義務もそのほとんどを果たせずにいるのではないか。こんないわば〝不良市民〟の集まりで世界に通用する良い企業ができるはずがない。だから我々社員はまず〝良き市民〟になるべく、会社での付き合いを削って家庭や地域に戻るべきである。そうカムバックホーム、カムバックコミュニティである。

三　エイリアンになる

日本のビジネスマンには〝顔がない〟とよくいわれるが、これもイエ・ムラ化した日本企業に起因するものと思われる。裏を返せば社員がどんどん自分の〝顔〟を持つようになれば、日本企業はイエ・ムラ化状態から脱却できるのではないだろうか。我々社員は皆それぞれに、学生時代はいろいろなスポーツや趣味に力を注いできたはずである。それが会社に入り、時間がつくれないという理由で、その大事なモノを自ら切り捨ててしまっているのである。

近年入社して数年で転職していく若者が増えている。これはもちろん彼らの側にも問題はあるのだろうが、企業や我々先輩社員に若い世代の感覚を汲み取る感性や彼らを引き止めるだけの魅力が乏しいのではないだろうか。そういう点でも、我々は仕事以外にも打ち込めるモノを見い出すべきである。

そしてそのために場所やお金が必要であれば、うまく企業を利用することも考えてよいと思う。社員それぞれがいろいろな知識や経験を得て、それぞれ異なる視点で企業を見つめることができるように、いわゆる〝企業内エイリアン〟になれば、日本企業の魅力も活力も一層増すものと思われる。

四　企業のバックアップ

企業のイエ・ムラ化脱却には、社員の意識・行動変革が最も重要であるが、それと同時に企業のバックアップも不可欠である。

まずは社員の余暇時間の拡大。これには近年国や企業が進めている労働時間短縮や、フレックスタイムや休暇制度の更なる充実、そして不必要な各種行事や集まりの削減が必要である。

次に、社員の会社外での活動についての支援も重要である。現在いくつかの企業が導入しているボランティア休暇の付与や、社員に対する各種施設の開放などを進める一方で、それらの活動内容を正当に評価していく制度づくりが求められる。

五　最後に

産政塾での集大成として、何か思っている事を書くという事であったが、読み返してみると、随分背伸びをして高飛車な事を書いてしまった気がする。私自身まだ家庭も持っておらず、また地域社会への奉仕ともほとんど無関係で生活をしている。唯一三年前から続けている草サッカーが自分の〝顔〟というべきものであろうか。そんなまだ実社会を十分理解していない輩であるから臆面もなく

書けたテーマであろうが、私自身の今後の目標および夢ということでご理解いただきたい。

今回産政塾に参加し、いろいろな考え方を持った方々とお会いすることができ、たいへんいい勉強になりました。皆様どうもありがとうございました。

日本人らしさ

㈱松坂屋　人事部
萬　谷　孝　之

〔プロフィール〕

萬谷　孝之（34歳）

- 1957年　愛知県生まれ
- 1981年　㈱松坂屋名古屋店　入社
  婦人セーターブラウス売場勤務
- 1985年　外商第一部外商第五課（法人担当）
- 1986年　外商第一部外商第三課（法人担当）
- 1990年　本社人事部人事企画担当
  現在に至る

〈モットー〉　三人行えば必ず我が師あり
〈家族〉　妻，子供２人

一

「遺伝子操作は神への冒とくだ」こんな見出しの記事があったとする。ここで使われている神から一体どんなイメージを描くだろうか。キリスト？仏陀？あるいは創造主？いや、そんな具体的なものではないだろう。ただ単に「自然の摂理」程度の意味合いに使っているだけのような気がする。つまりは形式的な言葉でしかないのではないか。こんな風に感じているのは私だけだろうか。

考えてみるに、私は「神を畏れる」という気持ちを抱いたことがない。子供の頃、母から「神様のバチが当たる」と叱られたことがたびたびあったが、私は叱り文句程度にしか考えていなかった。たぶん戦後生まれの日本人の多くが神や宗教を知識としては持っていても、日常生活でそれを意識してはいないと思うがどうだろうか。私はふと信じるもののない寂しさを感じることがある。

「あなたの家の宗派は？」と聞かれれば「浄土宗」と私は答える。しかし、それは「家が」であって、「私が」ではない。ところが、私はその時点で自分が仏教徒であると一応肯定していることに気付く。キリスト教のように洗礼を受けたこともなく、仏教の教示を受けたわけでもない（もちろん経は読めない）。強制されてもいないし、自分の意志で入信したこともない。結婚は神前で誓ったし、初詣も神社に参拝する。では、なぜ（一応）仏教徒なのか。

それは、単に先祖代々そうであったからにすぎない。もし私が死ねば経をあげてもらい、寺の墓地に埋葬してもらう手筈になると漠然と考えるからである。無宗教だと主張して周りから意見されるより、便宜上、仏教に籍を置いた方が楽だし、安心だという程度なのだ。ともあれ、世襲に流される従

順な私は、まぎれもなく日本人である。

二

私の大学はカトリック系であったため、キリスト教文学やキリスト教概説などで若干ではあるが、キリスト教について知る機会があった。（余談ではあるが、野外劇として有名になった受難劇にも十二使徒の一人として出演させていただいた）浅学非才の身で一宗教について所感を述べるなどおこがましいのであるが、私の感じたキリスト教における神の存在とは、普遍的であり、日常的であり、かつ個人的なものという印象であった。彼ら（彼女ら）にとっての神は、常に自分と在り、全ての行動や心の善悪をご覧になっている神の眼として意識されている。ただし、その神は悪行に対し罰を与えるような厳しい神ではなく、沈黙のやさしさでもって見守り続ける寛容の神である。

幼き頃より福音に導かれ、善悪を客観的に見てきた者と比べ、現在の私は大きく引き離されているにちがいないという想いに駆られる。普遍的価値観に憧れを感じる私もまた日本人である。

三

私を含めた日本の文化は「恥の文化」とよく言われる。世間体を気にし、周囲の眼が判断基準の大きな要素となっている。これは経済界、企業内、学校、個人生活、どの集合単位においても言えることだと思う。前述の普遍的な神の眼と異なり、世間の眼というのは、状況により一転二転し、感情的でやっかいなものだ。これを敵に回すと孤立し、かつ膨大なエネルギーを浪費する羽目になる。結果、

自然に依存的となり、集団指向が強くなるのだと思ってしまう。自分で決断できず、信念を貫けず、囲りの動向に合わせるといった日本人独特の性格は、まさに私の性格といえるだろう。

「赤信号、みんなで渡れば恐くない」式の判断姿勢が証券スキャンダルだの政治献金だの悪習を生み、また「旅の恥はかき捨て」的な道徳観が世間の眼の届かぬ海外において、日本人観光客のワーストマナーを生み出しているのであろう。私自身このような現実を知るにつけ、腹立たしくなるのであるが、一方で、日本人はこの程度だという諦めにも似た失望感と、自分自身の中にある嫌な面を見せられたような嫌悪感を覚える。

四

私は、ここまで日本人への嫌悪感を述べてきた。もちろん私の独断論でしかないので批判も多かろうが、お許しいただきたい。

ただ、はっきりと言えるのは、日本人は自分の欠点を良く認識していることである。他国にだって悪い部分がある。しかし、我々は他国の優れた面を見、自国の劣る面を見る。これは日本人の大きな長所である。たしかに日本は経済大国になったが、だからといって、傲っているわけでは決してないと思う。

昨今、日本への風当りは厳しい。日本の急テンポな世界市場進出は、他の国に当然脅威を抱かせるだろう。

しかし、歴史を振り返ってみれば、欧州はかつて植民地政策の下、世界中に進出した。米国だって、

全盛期に、がむしゃらに働いた時代があった。されば、資源のない小国、日本が欧米に追いつくにはそれ以上の努力（特に輸出）が必要だったわけである。欧米が歩んできたプロセスを日本は追従し、持ち前の向上心とチームワークでもって、短期間に成し遂げ、現在に至っている。ただ、忘れてはならないのは、日本が世界に肩を並べたのが、経済力のみであって、それ以外においてはまだまだ途上国であるということである。

私が思うに、日本は得意課目が一課目しかない受験生みたいなものだ。従って自他ともに先進国として合格点をもらうつもりならば、全課目において高得点を獲得する必要がある。その受験勉強を始めるのが現在の日本の立場であるにちがいない。

これから日本がなすべきことは、福祉、文化、世界への貢献、そしてゆとりある個人生活などなど、その分野における高度成長である。幸いにも、お手本となる先進国は数多くある。しかしながら、今までの技術輸入とは異なり、メンタルな部分の比重が高い分野は手本を輸入できても日本流に加工するのが難しい。

いや、その前に手本を見つけるのが難しいにちがいない。まず、経済的見地のみで見てきた各国の見方を変えることが必要だろう。

五

私が、会社からの研修で、パリ松坂屋へ三か月間勤務した時、こんなことがあった。当時私は、フランス人の遊び中心的考え方や、お役所的ドライな仕事態度に半ば失望していた。ファッションと芸

術と観光以外は見るべき点がない国と割り切ろうとしていた。

ちょうどその頃、日本では新一万円札が発行され、私はパリ駐在員の方が日本人観光客より譲っていただいた新札を見せてもらった。パリで見る日本の新一万円札である。この時、駐在員の方から聞いたエピソードなのだが ――

彼はフランス人に新札を自慢げに見せたそうだ。「日本はこの新札から盲人用金額表示を導入したんだぞ。眼の付けどころが違うだろう」と言いながら。ところが、予想外にもフランス人は当たり前のように「そんなもの、フランス紙幣には昔からあるよ」と言葉が返ってきたとのこと。

その話を聞いて、私は虚だと思いポケットからフランス紙幣をつかみ出してみた。それは日本のものとは違い、上質な紙を使っているわけでもなく、印刷だってまるでおもちゃの札みたいなのだ。ところがよく見ると、はたして片隅に針であけたような穴があいていた。雑ではあるが、十分事足りるものだ。この途端、私は「これは侮れない国だぞ」と反省した次第であった。

六

或る国では常識で自慢にもならない事柄が、日本ではようやく取り掛かるというケースは珍しくないだろう。視点を変えて学ぶ姿勢こそが経済大国から、いわば総合大国へと生まれ変わる道である。さすれば、集団主義などと言われる日本人らしさが、世界一の結束力と問題意識を持つ国として評価されるだろう。

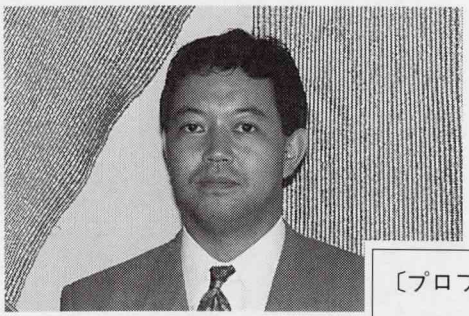
日本人は集団の中でこそ、個人の能力を最大限引き出すのが得意である。企業、市民団体、学校、

その他さまざまな形の集団の中で日本人は福祉、文化、環境問題等立ち遅れた分野においてそのレベルを世界トップ水準まで押し上げるだろう。総合的高度成長を成し遂げる可能性を日本は持っているのである。さらに言えば、経済力のある日本にこそ使命があると思う。

経済大国である上に、福祉大国であり、文化大国であり、治安大国である。つまりは総合大国となった時こそ、日本は自信をもって国際社会の仲間入りができるだろう。そんな日が必ず来ると信じている。特に環境問題において、日本は世界のリーダーになると確信したい。なぜなら、我々日本人は、いにしえより花鳥風月を愛し、四季の美しさを感じ、自然と身近に接してきた国民であるから。

産政塾に参加して感じたこと

全松坂屋労働組合　中央書記次長
水　野　和　明



〔プロフィール〕

水野　和明（34歳）

- 1957年６月25日生
- 1981年　㈱松坂屋　入社
  ハンドバッグ売場に配属
  その後組合専従（支部）
  外商を経て現在に至る

〈モットー〉　虚心坦懐

〈家族〉　祖母，両親，妻，男の子３人

子供の頃の思い出

土曜日の学校からの帰り道、六年生が「今日は魚採りにいくで、俺んちに集まれ」と一言発すると、各々お昼ご飯を食べた後一年生から六年生まで彼の家に集まる。そして夏の午後、みんなでびしょ濡れになって遊ぶ、これが私の小学生の時の夏の土曜日の過ごし方だった。夏だけではなく、一年中、六年生（ガキ大将）を中心に近所の小学生全員が遊んでいた。

みんなで遊ぶうちに、下級生は自然と魚の採り方や、ザリガニの採り方を覚えていった。今になって考えれば、この集団、上級生が保母さんの役目をしている保育施設といえなくもない。上級生にとってみればそんなことは少しも意識していなかったし、実際には下級生に威張れることが楽しみだったのかもしれないけれど、でも、下級生にとってはみんなに遊んでもらっていたことは違いないと思う。

私は田舎に住んでいるので、小さい頃はこんなグループはいくつもあった。私自身ガキ大将というリーダーの座についていたこともあった。この集団は、その地域の保育所であり、小さな子供たちにとっては遊びの最高の学府だったのではないかと思う。上級生という遊びの天才たちから、魚のつかみ方、かぶと虫のいそうな木、そのほかいろいろな楽しみ、そしてリーダーシップを学んでいったのではないだろうか。

そうしてみると、この上級生たちは、自分たちが気がついていないうちに、ある種の地域への貢献、社会的貢献をしているといえなくもないと思う。

テレビから流れてきたフランス人の言葉

ある朝テレビを見ていると、フランスにおける日本のサラリーマン評が流れてきた。夜遅くまで残業の灯りがつく日本企業のビルを指さしてフランス人はこういったそうである。「人間というものは三つのものに対し責任がある。一つは地域に対する責任。二つ目は家族に対する責任。三つ目は会社に対する責任。ところが彼ら（日本人サラリーマン）は、会社に対する責任は果しているが、ほかの二つの責任は放棄している。地域や家族に対する責任を放棄していいのは囚人と軍人だけだ。日本人は軍人か」朝のテレビを時計代わりにして会社へ行く準備をしていた私には十分考えさせられる言葉であった。

私たちは、「仕事だから・・」という言葉を意識はしていないけれど、金科玉条のように使ってはいないだろうか、近所づきあいは奥さんにまかせっきりで近所の人とほとんど話もしない。子育てに関しても、これも母親任せ、子供が今何を考えているのか聞いたこともない。だっておれは会社で一所懸命働いているんだ。こんな男性は世の中に大勢いるのではないだろうか。

最近、「企業の社会参加」がクローズアップされ産政塾でもそれに関する話をよく聞いたが、「企業」の前に、「個人」の社会参加はどうなっているのかと考えてしまう。人は一人では生きていけず、いろいろな集団（社会）を作るなどという話は聞き飽きたことなのに、その集団に対し、ほとんど何もしていない企業人が多いことも、また事実なのではないだろうか。

働く時間が長く、とてもそんな地域活動や家族サービスなんかできないという反論が聞こえてきそ

うだ。確かに、現在の就業環境そのものが、私たちの社会参加の妨げになっている部分があることは事実だと思う。しかし、そのことに甘え、社会参加などしなくてもよいのだということが、果してよいのだろうか。

一方、企業側にしても、従業員が社会参加できる環境整備をすることが、広い意味で「企業の社会参加・貢献」につながるのではないだろうか。

サンフランシスコの大地震の教訓

一九八九年にサンフランシスコを襲った大地震は記憶に新しい。大都市における自然災害の恐ろしさをまざまざと見せつけられた悲惨な事件だった。このサンフランシスコの大地震に関するいくつかの新聞記事の中で、私に強い印象を与えたものがあった。記事は、地震から数日たった市民の暮らしぶりを伝えるものだった。

地震の最もひどかった地域は、まだガス漏れの恐れもあり、電気も止まったまま、電話はかけられず、信号機も止まったままの状態が続いた。しかし、市民生活に混乱はみられず、例えば交差点では、フォーウェイストップ（四方向すべてが一旦停止する）が行われ、公衆電話では、みんながができるだけ短く話を切り上げていた。こうしたことはすべて自主的に行われていたようだ。献血に至っては必要量を大幅に上回る血液が献血されていた。

もう一つ私を驚かせたことは、救助活動や壊れた家を直すなどといったことに多くの人――その多くの人たちは自分の家が壊れているにもかかわらず――が加わっていたことだ。自分も被害

者であるけれど困っている人を見ると手を差し伸べる、このことが無意識のうちに行われていた。

困った時お互いに助け合うことが意識せずに行われることは大変重要なことではないかと思う。日本においてこういう状態になったらどうなるだろう。自主的にフォーフェイストップは行われるだろうか。長電話する人はいないだろうか。献血は必要量集まるだろうか。深く考えさせられる問題ではないだろうか。

身近なことから始めよう

今、私たちにできることは何かと考えるとき、重要なことは、自分は何ができるんだ、ということのように思えてくる。「これをやらなくては」ではなく「これができる」とか「これがやりたいんだ」ということが長続きするポイントだと思う。つまり、社会貢献だ、社会参加だと余り意識せず、自分のやりたいことは何かを見据えることが大きな社会貢献・参加になってくる部分があると思う。さらにいえば、人に言われたからとか、社会参加せねばならないなどと考えて行うことは続かない。それでは何の意味もなくなってしまう。

そんな気張らなくても、私たちができる社会参加・貢献はいくらでもあると思う。自分の好きな分野のことをみんなに話してあげることや、自分の得意なスポーツのコーチになることだって可能だ。

私の知人で、学生時代バドミントンをやっていた人がいるが、彼が、バドミントンが再びやりたくなり地方自治体の主催するクラブに参加した。参加してみると自分が一番うまいことがわかり、今ではそのクラブのコーチになっている。彼は好きなバドミントンで地域の中に入り、クラブのメンバー

からは頼られる存在になっている。彼にしてみれば、特に地域への責任とか貢献などということは念頭になく、ただバドミントンがやりたかっただけのことである。

自分のやれること、やりたいことに地域、家族を巻き込んでいけばそれがその地域、家族の一員として責任を果たすことにつながるのではないだろうか。

日本人は自分の周りの人には優しいけれど、知らない人には冷たい、と言われている。我先に争って乗る電車、後ろの人を気にしないドアの開け閉め、倒れている人がいても知らん顔、気付かずにやってはいませんか。自分たちがよければ、他人はどうでもいいと受け取れるこれら行動は、社会性の欠如と見なされなくもない。『しつけ』の中でもこの社会性に関する部分は、これからもっと大切になってくるのではないだろうか。

子供達を社会の一員と認め、彼等に対し他人を思い遣る心、社会のメンバーとしての心構えなど教えていくことが、これから私たちにできる大きな社会貢献ではないかと考えている。私自身三人の子供の父親として、彼等が意識せずに社会に参加できるように育てていきたいと考えている。そのためにも絶えず意識していることは、私自身が社会参加をしていくことだ。子供にとって一番の教師は両親であると思う。両親の家族への接し方、地域への接し方が、子供たちに大きな影響を与えると思う。

気楽に地域や家族に接していくと結構楽しめるということが最近実感できるようになってきた。子供の友達の家族との付き合いは、会社以外の人間と接する機会の少ない私にとって、とても新鮮で楽しい。今後もっとふやしていきたいと思っている。交際範囲が広がることは、私自身の活動領域が広

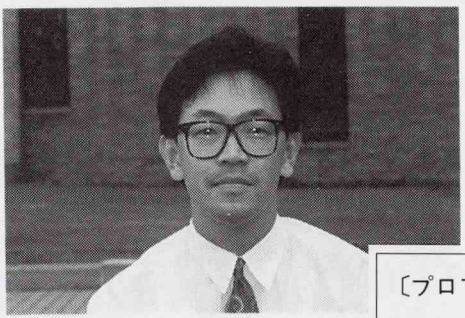
がっていくことにつながり、私にとっても重要なことになってきている。

取りとめのない話になってしまったが、私が今一番感じていることを述べさせて頂いた。私たちが次代に何ができるかといえば、『教育』（私たち自身による）が一番だと考えている。次代を担う人間に子供達が育っていくよう最大の協力をしていきたいと考えている。

最後に、産政塾での会合は私にとって「ボランティア」とか「社会貢献」といったことについて大変勉強になった。こういう機会を与えて頂いたみなさんに心から感謝したい。

価値観を拡げよう

アイシン労働組合　執行委員
水　野　真　二



〔プロフィール〕

水野　真二（29歳）
- 1961年　　愛知県知多郡生まれ
- 1984年　　アイシン精機㈱　入社
- 1990年　　アイシン労働組合　専従

〈モットー〉　バランス感覚

価値観を拡げよう

いきなり哲学的にスタートしよう。人が生きるために一番必要なものは何か。私は「希望」だと思っている。人は昨日より今日、今日より明日がよくなっていくと信じているからこそ、生きているのである。人が活き活きと生きるためには、今日より明日がよくなるという「上向きの時間の流れ」が不可欠なのである。

この「上向きの時間の流れ」が最も顕著にわかるのは、子供のときである。子供は確実に大きくなるし、賢くなっていく。つまり、「成長」というかたちで「上向きの時間の流れ」に乗る。さて、三十歳間近の私の場合はどうなのだろう。もちろん、おなかがでて今まではいていたズボンがはけなくなることはあっても、一七〇㎝の身長が一八〇㎝になるわけではない。しかし、精神面では今なお確実に成長している。よく結婚式の最後の挨拶で「私たちは、まだ人生の新たなスタートをきったばかりの若輩ですが……」などとやるが、男三十まだまだこれからなのである。

さて、自分の持っている価値観を変化させること、あるいは拡げることも、精神面での成長を成し遂げるための大きな要素である。私にとって、初めて労働組合の仕事に携わった（その中で最も素晴らしかったのは、産政塾であったのはいうまでもないが……）この一年は、価値観の変化・拡大という意味では、非常に大きな一年となった。

昨今、労働組合の活動のキーワードは、「ゆとり・豊かさ」であり、「生活時間の拡大」である。しかし、現実には「ゆとり・豊かさ」とはほど遠い状況にある。それはなぜか？　ある人は問題の解決

を政治に求め、ある人は設備の自動化の遅れに求めるだろう。しかし、一番大きな要因は、我々の意識にあると思う。日本の企業文化は、やはり勤労を美徳とするものである。多くの人は毎日定時退社してアフターファイブをエンジョイする「五時から社員」よりも、毎日夜遅くまで責任を持って働く社員のほうが美しい存在であると思っている。ゆえに、少なくとも会社生活をしている間は、会社社会で認められること、つまりは会社の中で出世することが、最も大切な価値基準である。もちろん私も入社以来ずっとそう思ってきた。が、この一年間の労働組合活動を通じて私の基準も寸分変化したように思う。先程もふれたように、労働組合の活動は「労働時間重視から生活時間重視」へと大きくシフトしようとしている。特に、人生八十年時代といわれる中で、定年退職後の人生設計の意味あいはますます大きくなってきている。アイシン労組でも、五十三歳の組合員を対象に「チャレンジ・ザ・55」という人生設計研修を実施している。退職後の人生を、健康・貯蓄・趣味・家庭・仕事の各ファクターについて、今一度みつめ直してみようというものである。その中で、「趣味を考える」というカリキュラムがある。定年後は毎日が休日である。さて、あなたは休日をどのように過ごしますか?……ということで、一日の行動計画表を三種類作ってもらう。三十年以上の歳月を、長時間労働で名高い? 自動車産業に捧げてきた人々である。世界最高水準の自動車を作り上げるのは得意でも、自分の自由時間を設計するのは苦手な人々である。大半の人は、土曜日は休日出勤、日曜日は半日テレビを見ながらゴロ寝、昼からはパチンコという生活のパターンである。定年になると、自由時間が増えて困ってしまうのである。

さて、この研修の対象者は組合員のみである。課長以上の層は参加していない。つまり、五十三歳

時点で課長になっていない層であるから、「会社で認められること」が唯一の価値基準であるとすれば、人生の成功者とはいえないだろう。しかし、私はこの中に人生の成功者を見つけたのである。というよりは、私の価値基準が変わったといったほうが正確かもしれない。

人生設計研修では、参加者の仕事以外の部分の拡がりを知ることができる。趣味の道をきわめて趣味教室を開くまでになってしまった人もいるし、地域のボランティア活動のリーダーになり尊敬を集めている人もいる。こういった人たちは、五十三歳にして人生、前途揚揚である。会社以外の自分の生活を犠牲にして、会社の中枢にすわっても、定年になって仕事が終わって何も残らない人生と、定年後もいくつか自分の世界を持って、いきいきと生きていく人生、どちらが素晴らしい人生だろうか？

塾の第六回会合の木原先生の講演は、まことに印象深いものであった。企業の社会貢献に対する先生のユニークな考え方もさることながら、「現代の男性諸氏は、救われねばならないプアーな生活をしている」という言葉には衝撃をうけた。

日本でも、ようやく福祉活動や社会貢献活動がクローズアップされるようになってきた。しかし、企業の第一線で活躍する男性諸氏の多くは、福祉活動を行うのはヒマな女性か、チョット変わった人がやるものだと思っている。（こう思うことがプアーな証拠なのだが……）かくいう私もそのひとりなのだが……。

労働組合にきて、私も社会貢献活動に参加することになった。まず「クリーンキャンペーン」、名前はカッコイイが、要はゴミ拾いである。労働組合に来てまだ一週間、右も左もわからないころ、栄の

久屋公園でこの「クリーンキャンペーン」に参加した。当日はレジャーには絶好の快晴。（九月の暑い時期だったので）ゴミ拾いには最悪の快晴でもあった。たばこを吸わない私は、どうして私がたばこの吸いがらを拾わなければならないのだろうと、全くやりきれない気持ちだった。組合を経験して一年、再び「クリーンキャンペーン」に参加することになった。今度は伊良湖である。例によって浮かない気持ちで家を出た。浮かない気持ちで海を眺めた。私は海が好きである。砂浜にはあちらこちらにゴミが散らかっていた。どうして海を汚すヤツがいるのだろうと腹立たしい気持ちになった。

ゴミ拾いが終わったあともう一度海を眺めた。ゴミひとつないきれいな砂浜が拡がっていた。この瞬間、イヤだったゴミ拾いをやって良かったと思えた。

日本人は働きすぎである。社会に貢献する意識に乏しいといわれる。これはまだまだあまりにも仕事、つまり労働時間に価値観のウエイトをおいている層が多いからであろう。「余暇」ということばがある。文字どおり解釈すれば、「余」あまった、「暇」ひまな時間ということになる。日本人の大半の層の労働時間以外の部分に対する考え方は、まだまだ余った暇な時間なのである。

最近よく使用される「生活時間」という言葉は、余暇とは全く異なる概念だと思う。「生活」は「活き活き」と「生きる」である。「生活時間」は、自分の趣味を拡げたり、旅行をして自然や歴史を楽しんだり、会社以外の多くの人々との交流を深めたり、本を読んで見識を高めたり、地域社会の中でボランティア活動に参加する時間である。そして、何よりも大切なのは家族のきずなを深めるための時間である。余った暇な時間ではなく、労働時間と対局をなす重要な時間である。

二十代前半の若者は、「生活時間」を活用することがじょうずである。というよりは、「生活時間」

に必要な「お金」を稼ぐための「労働時間」であると思っている人が多いのではなかろうか。

私にとって「労働時間」は、お金を稼ぐための時間ではない。会社という大きな組織を通じて自己実現をするための時間である。「労働時間」「生活時間」ともに大切である。

我々三〇歳前後の年代は、それぞれの企業で実務面の中核となる年代である。かつ、「労働時間」と「生活時間」のバランスをじょうずにとることができる世代でもあると思っている。我々の世代がリードして、「労働時間」「生活時間」ともに希望の持てるものにしていかねばならない。

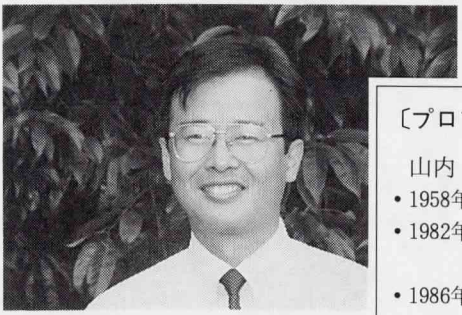
今、まさに日本は経済大国から生活大国へ一大進化を遂げようと動いている。しかし、生活大国人の価値観を手に入れている人は少ない。「生活時間」の中には、多くの日本人の知らない喜びや生きがいがありそうである。労働組合の活動の重要な柱は、働くものの価値観をもっと「生活時間」の中に発見させることである。一人ひとりの価値観が集合し、ある一つの傾向を持ったとき、それは「文化」と呼ばれる。労働組合の活動は、「生活大国の文化」を創造する活動なのかもしれない。我々執行委員は気をひきしめて取り組まねばならない。

そのために、何より大切なことは我々執行委員自身が価値観を拡げることであろう。そういった意味で、産政塾の仲間と過ごした日々はとても貴重であった。全く私とは違った価値観を持った同世代の若者に出会えた。松下政経塾生は、とても同世代の若者とは思えないほど、じっくりものを考え自信を持って主張していた。青年海外協力隊の参加者は、遠くアフリカの青年との深い心のきずなを熱っぽく語ってくれた。これらの出会いは、今後の私の人生にとって大きな糧となるはずである。その中で、最も貴重な出会いは、産政塾に共に参加した二期生のみなさんたちとの出会いであった。冒

頭、人が生きるために一番必要なものは「希望」であるといった。これから、我々も四十年、五十年といよいよ人生の円熟期を迎えていくのだろう。そのときに、もう一度産政塾のメンバーに出会えた時、お互いに今と変わらぬ希望を持って生きていられるよう素晴らしい人生設計をしようではないか！

あなたの夢なんですか

トヨタ車体㈱　人事部
山　内　　潔



〔プロフィール〕

山内　　潔（33歳）
- 1958年　愛知県生まれ
- 1982年　トヨタ車体㈱　入社
  生産管理部配属
- 1986年　人事部労務課へ
  現在に至る

〈モットー〉　潔し（名前と同じ）
〈家族〉　妻（弘美）
〈趣味〉　カタカナ・スポーツ
（テニス・スキー・ゴルフ・ウインドサーフィン・温泉ピンポン）

「あなたの夢なんですか」

「あなたの夢なんですか。」その突然の質問を受けたのは二年程前のことだった。学生が会社訪問に来たのでOBとして顔を出して欲しいと言われ、のこのこと出ていった私は、会社の事、仕事の事、等々思う事を話しまくったのである。話もひと通り済み、学生が最後に、「では最後にもう一つお聞きしたいのですが……」の言葉に続いて、その質問は突び出してきた。それまで少なくとも落ち着いた素振りで応対していた私は、思わず考え込んでしまい、それこそしどろもどろの応答であった。その後、その学生の姿を見ることはなかったが、その学生の〝ひと言〟が私に与えた衝撃は強烈なものとなったのである。

それまでの私を、若干の紹介も交じえ、顧みてみよう。入社後の四年間は、生産管理部署で、カリーナ・コロナ等の、日常の生産進度管理と打切り・立上りというイベントをサポートすることなどで、忙しくも喜怒哀楽に富む毎日を過ごした。その後、現在の人事部門へ移ったのであるが、それまでの勢いできた私は、その堅苦しく重い雰囲気に、喜びを見い出すことが出来なかったのである。それこそ、会社生活を漫然と過ごしていた矢先にその学生に会うことになったのである。

産政塾でえた宝物

「今のままの自分で終わりたくない」或は「自分はこの先どうしたいのか」結論の出ないまま、いたずらに時が過ぎようとした時、上司からこの産政塾参加の機会をもらったのである。

産政塾に参加して、多くの同年代の人達の意見や貴重な講師のお話を伺い出来、実に良かったと思っている。

産政塾の会合で一番の思い出は、やはり「松下政経塾」訪問であろう。時折りしも春の労使交渉真只中の慌ただしさの中であったが、身の引き締まる静けさに包まれた素晴らしい環境の中で夜遅くまで議論した政経塾の塾生達、そして、その塾に託した松下幸之助氏の熱き思いに触れることが出来、思わず感動してしまった。(塾を後にしてから、学生時代の友人と飲んでいるうち、感動が転じて、思わず説教してしまったくらいである)

今でも覚えているのは、「思いのなき者は去れ」「思うことなしにたどりつくことなし」「思いの熱さこそ尊い」といった一連の言葉達である。一見、宗教がかったようにも聞こえるこれらの言葉であるが、私にとっては忘れ得ぬ言葉となっている。

次に思い出すのは、福祉教育者木原孝久氏のユニークな「企業の社会貢献」理論である。やはり強烈な印象として残った言葉として「休みの日の男は〝カス〟であり、福祉に活用すべきは〝本業の中の男〟である」又、「企業が損をしてやる福祉は永続きしない、〝共存共栄〟をはかるべきだ」というのがあり思わずうなる場面続出であった。また、募金のあり方についても、実に示唆に富んだ話を聞く事が出来た。

私自身、最近仕事で「ゆとり・豊かさ」「社会貢献」「グッドカンパニー」なるキーワードを考えたりもするが、木原氏の発想は、仕事面でも、そして家庭や地域社会に身を置くものとして個人生活の面でも大いに参考となった。

もう一人印象に残った講師として、元青年海外協力隊員の中村氏をあげたい。中村氏は二十八才の本当にしっかりした好青年である。中村氏は「俺はこのままでいいのか」「俺のような者（氏は自動車販売会社のエンジニアである）でも何か役に立てるはずだ」という気持ちを、青年海外協力隊参加にぶつけたのである。そして中村氏は現地（ケニヤ）で任務中、多くの事に悩み苦しんだ。生活の違い、言語の違い、そして何より労働慣習の違いに苦しんだ。中村氏は、自分がいなくなっても現地人だけで技術・道具そして生活を維持出来るよう、時には突き離したり、帰国後、有能な現地の一人を、日本の工業高校へ留学させる等の苦労をしている。しかし、中村氏の思いは、少なからず中村氏の自身の努力により実現させているのである。とても真似出来ないが、私にとっても実に示唆に富んだ体験談であった。

これら産政塾を通して得られた貴重な経験は、「私にとっての宝物」である。

海の向こうのつわ者共

産政塾とほぼ期を同じくして、私は二度ニューヨークへ出かけた。いずれも会社を数日休んでのことだったが、この事を話すと、以外に他社の人が羨ましく思うので、私も理解ある上司と同僚達に感謝している。

ところで、私がニューヨークへ何度も足を運ぶのは、そこが好きな事もあるが、実はアメリカン・ドリーム（私にとっては）に会いに行くためである。そのアメリカン・ドリームというのは、二人の女性のことで、共に日本の大学を出て日本で就職したのち、ニューヨークへ渡りＭＢＡを取り、現地

の金融機関で働くバリバリのキャリア・ウーマン（一緒に遊ぶ姿からはとても想像できないが）のことである。彼女らに会っていると、もともとの才能も然る事ながら、その強い思いと努力の結果であると感じざるを得ないのである。

妻の関係で知り得たこの二人、今ではお互いに何日か滞在し合う間柄だが、そう不思議と松下政経塾の塾生がそうであったように、彼女らと会って話してるだけでこちらが元気になるのである。

一人の女性の口癖は「元気だけが取り得だから」である。彼女の屈託のないこの言葉から逆に「思いや努力を支え続けるためには、心の元気さが不可欠」なことを学び取れる。

私は、そんな海の向こうのつわ者共に、いつまでもエールを送り続けたい。

「もう三十三」いや「まだ三十三」

今年で私ももう三十三才になる。立派にアタマやお腹が気になる年になった。一方、「三十にして立つ」とも言われるが、今何に志を立てたら良いのか迷い続けているのも現実であり、どうも容姿とのミスマッチが激しい。

「立志の要は、よく自分を知り、身のほどを考え、それに応じて適合する方針を決定すること」らしい。私だけではないと思うが、自分が何にむき、何に不むきなのかは、好き嫌いの感情が入り込み、冷静に判断出来ない。むしろ第三者の方がよく分かるようだ。また、身のほどを考えるのも苦手で、ついつい背伸びしがちになってしまうのである。

昭和三十年代前半生まれは「指示待ちプラスα世代」なんだそうで、指示通りやるだけでなく「何

か自分なりにもう一工夫を」と考えるそうである。これも即ち、迷いを生ぜしむる悪癖かも知れない。

こうして考えてみると、孔子の如く「三十にして立てる」者ばかりでなく、私の様な者も少なからずいるはずである。

「自分の過去は、精一杯生き抜いたか否かにより、将来の糧にも重荷にもなり得る」はずである。私も志立たぬままがむしゃらに走ってきたが、それも決して無駄ではないはず、むしろ、機の熟すのを早めたとも思えるのである。そう三十三にして立てれば十分なのであり、「もう三十三」でなく「まだ三十三」なのである。

私の夢

先述したように、私は夢について特に考えることもなく過ごしてきたわけである。

名古屋市内に居を構え、家庭を持ち、仕事はお陰さまで忙しく、特段の不満はない。

しかし、明治の実業家渋沢栄一がその人生哲学の中で「社会のため人のためと考えた行動や仕事ぶりは必ず自らの目的にもかなう」と言ってるような、広く社会（会社や家庭も含め）を思んぱかった行動が不足しているようである。

昨今、外来の〝アナロジー〟・〝メセナ〟といった言葉がもてはやされているが、むしろ私は〝良き社会人（或は良き地球人）〟であることを重要に思うのである。

社会・家庭・会社の中、それぞれに対し精一杯生きることが重要とされる社会人。抽象的で現実的なことかもしれないが、私の志・夢は実はそこにあると思うのである。

そして、私の求める〝良き社会人〟は次の三つの顔を持つ。即ち、

①「良き企業人」としての顔
②「良き家庭人」としての顔
③「良き地域人」としての顔

の三つである。この中で弱点は、やはり地域の中の自分であろう。今後どう働きかけていけば良いか、渋沢哲学や前述木原氏の社会貢献論に学ぶことにしたい。

家庭人としての自分も欠点だらけである。仕事の忙しさに託けて殆ど妻に押しつけている為、このままでは将来「粗大ゴミ」間違いなしである。誰でも、家庭内の応分の責任は果たさねばならない。

では、企業人としてはどうか。確かに多くの時間を会社に費やし、頑張ってはいるものの、漫然とやってないだろうか。もっと仕事にこだわるべきではないか。

折しも「魅力ある企業づくり」を推進し、内外に認められることが不可欠な世となっている。労務企画に携わる者にとってはますますこだわりが要求される。

上司言わく「夢をもって行動する人は、美しく輝いているだけでなく、必ず伸びる」。私は〝良き社会人〟を目指し、「一事全力主義」で臨みたい。

「私の夢元気です」

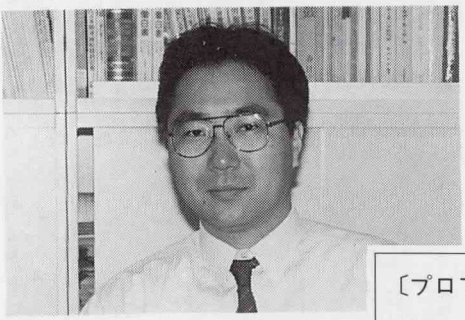
今回の産政塾に参加し、数多くの刺激を受け、最後にはこういった文章として頭の中を整理する機会を頂き、事務局の方々に御礼申し上げたい。（文章の稚拙さについては、若輩者が恥ずかしながら書

いたものという事でお許し頂きたい）

こういった機会を得て、自らに夢が見られたことを大切にし、夢を育んでいきたい。そして今後はこう答えてみたい「私の夢元気です」と。

豊かさの代償

㈶中部産政研　主任研究員
梶　田　宜　孝



〔プロフィール〕

梶田　宜孝（34歳）

- 1957年　京都市に生まれる
- 1982年　日本電装㈱　入社　営業１部配属
- 1988年　日本電装労働組合執行委員専従
- 1990年　全トヨタ労連専従役員と同時に中部産政研へ

〈趣味〉　登山，ヒット曲を覚えること
〈家族〉　妻一人，娘（５歳）一人

ここのところ休みの日になると、約一時間程ウォーキングをしている。きっかけは、少しというかかなり太ってしまったことと、五月に長い間自分の趣味にしている登山に行って、なんでもないところで不覚にもバテテしまいなんとも情ない思いをしたことからだ。

捨てられた空き缶の多いこと

歩いて気づくのはいったいこんな田舎道にだれが捨てるんであろうかと思うほど道端に空き缶が捨ててあることである。それもある特定の場所に固まって捨ててあるのではなく、もうずっと続いている。空き缶をたどって日本一周だって可能だと思われる。

このいわゆる缶ジュースや缶コーヒーの類の誕生はそんなに昔のことでない。人から聞いた話だが、関西のコーヒー豆の会社が手軽にビンの回収コストをかけずにコーヒー牛乳を提供できないかということで開発されたのが始まりらしい。

さてこの捨てられた空き缶、いったいどうしたものか、考えてみた。でもその前に「別に誰に迷惑をかけるわけでもないんだから、そんなことはどうだっていいじゃないか。それより缶製品で受ける恩恵の方が大事であって、そんなこと言いだしたらきりがないよ」という声が聞こえてきそうである。そう、確かにこの「捨てられた空き缶」特に誰に迷惑を掛けているわけでもないから始末がわるい。しかしこの「誰に」というのがいかにも、我々らしいというか、自分に直接不利益がなければ良しとする今の風潮にあった考えだ。しかし、便利であるという「物質的な豊かさ」を追い求め過ぎたがゆえに、「空き缶」という「豊かさの代償」を育ててしまったことは事実であるし、「空き缶は捨ててあ

るよりは捨てないほうがいい」という発想から垣間見た今の豊かさについて考えてみたい。

わかってはいるんだが

では、どうすれば良いのか、「捨てなければよい」のである。こんなことは誰だって分かっている「なにをいまさらバカなことを」と言われそうだが。一番の解決策は「皆が捨てないこと」なんである。でも捨ててしまう。どうしてなのだろうか？さらに考えを進めてみよう。すると次の二点が浮かんでくる。一つは「捨てても惜しくない物である」ということ。二つ目は「外でよく買うし飲む」ということである。

では一つ目の「捨てても惜しくない物」ということに対しての解決策はどうすれば良いのだろうか。「捨てては惜しい物」にすればよい。じゃあビンの様に缶代金を価格に上乗せして販売してはどうだろうか。という考えが浮かんでくる。しかし事はそううまく運ばないだろう。十円や二十円じゃだれも「惜しい」とは思わないだろうし、かといって百五十円・二百円と今の倍の値段で売ったとして、そんなことが許されるのか。「ナンセンス」といわれかねない。それにメーカーにしたって、ビンは再利用できるから、回収したいし、その為にビン代金が入っているわけである。缶では到底この考えは成り立たない。

次に二つ目の「外でよく買うし飲む」ということに対しての解決策は、どうすれば良いだろうか。まさか「外で飲まないようにすればよい」というつもりはない。いずれにせよどう考えてもどれも決定的な考えは思い浮かばない。そりゃそうである、自分ごときが考えて簡単に解決策が見つかるよう

ならば、昨今の御時世からいって、メーカーが真先に飛びついて今頃は「我社は地球環境に寄与しています」なんて意見広告を堂々とだしているはずだ。

昨年「シンガポール」へ行く機会に恵まれた。行ってみて大変驚いたのは街が非常に綺麗であるということだ。ゴミ一つ落ちていないというのは言い過ぎかもしれないが、まあ「空き缶」は落ちていなかった様な気がする。これはシンガポールへいった人なら恐らく現地のガイドなどからさんざん聞かされたりすることなのだが、「タバコや空き缶を捨てると結構重い罪になって、罰金もかなりのものをとられるからだ」という話を聞かされる。しかし、ここで成功しているのは「罰金をとられることがいやだからもあるが、そうすることがシンガポールの人々の誇りになっているからなんでは」とも思える。果たして、今の日本で同じことができるかしら?おそらく、違法駐車とおなじようにいたちごっこで終わってしまいかねない。

そこで、もう一度原点に帰って考えてみた「捨てなければよい」んである。その為に皆が努力すればよいんである。しかし「方法」ではなんとも解決に限界がみえてしまう。「方法」よりはなんていうんだろう「心」に根ざしたものを私達の中にもう一度作り直すことが大切なんだと思う。それは、仮に「空き缶」が「豊かさ」を代表するものであるなら、それを代償としてなくしてしまったものが何なのかをつかむことから解決の糸口が見えないだろうか。

豊かさの代償に

「豊か」であることは心地よい、しかしこの「豊かさ」についてはっきりした定義はない。国語辞

典を引いても「充分で不足のないさま」としか書いてなく、何が充分とは言っていない。仮に「物的に満たされていて、心も満たされていることが『豊か』であると」と言うなら、われわれは今どういう状態にあるだろうか。

まず「物的豊かさ」はどうだろう。会社に入って一～二年の若者が二百万も三百万もする車を買ってしまう時代である。おそらく豊かなんだろうと思う。同じようにOLが海外に何度となく出掛ける時代である。だから豊かなんだろうと思う。なにもここで「昔は違った、今の奴っあぜいたくだ」と言う気は毛頭ない。買うことが出来る者は買えば良いし、海外旅行も行けるなら行けば良い。「昔はもっと質素に将来のことも考えて貯金でもしたもんだ」などという論議は「アナクロニズム」にすぎない。しかし一方で気がついたらサラリーマンではとても買えない土地と家が私達の前にたちふさがっている。こうしてしまったのも私達であれば、これで困っているのも私達である。バブルとかいって泡まみれになってかせぎまくった「○×マン」も多いと聞くが、彼らは果たしてこの問題は解決できているんであろうか。結局、私達が手にしたのは「程々の豊かさ」にすぎない、そして「何とかやらエクスプレス」に乗って北海道へ三泊四日の旅だとか豪華客船東京湾ワンナイトクルーズなどといった、西洋の金持ちの物真似、いってしまえば「成金趣味」程度のことしかできない。できないもののひがみといわれればそれもそうであるが、こんなことがいったい私達に何をもたらしてくれるんであろうか。

じゃあ「こころの豊かさだ」なんていうことでまたいろんなことをやりだしている。旅行にしたって、今はアウトドア志向で大自然の中に飛び出してその「こころの豊かさ」とやらを家族で取り戻そ

うなどといって、ＲＶの車が売れている。そしてオートキャンプに家族で行こうなどということで、一年に一度くらいしか使わない、テントやバーベキューセットやらもうなにもかもを何十万円も掛けてそろえてしまう。そして現地でやっていることといったら、ごみは持ち帰らず、ＲＶ車で田畑に入り込み、そんなことをして「ああ、豊かだ」などといっている。八ケ岳の村ではもうオートキャンプ族はお断わりなどと言われている。

中高年者の登山ブームとてしかり。山小屋に来て風呂がないと驚いてみたり、荷物が重いからあとで宅配便で送ってくれ。なんていう輩が山ほどいると聞く。中高年者の遭難が多いのもここのところの傾向になってきている。「こころの豊かさ」を勘違いしてここでも「成金趣味」が見え隠れする。おまけにこういう輩に限って「福祉カンパ」などで、五百円だすのさえこだわってださない。一年に一度しか使わないキャンプの道具に何十万円もだすのと五百円で十人以上の子供達を救えるワクチンを買うのといったいどちらが価値があるだろうか。いやどちらも使い方では価値があると思うが、私達はもう一方の価値を見出すことをどこかに置いたままにしてきてしまったのではないだろうか。

「昔は物は貧しかったが心は豊かだった」などということは決して今のような時代には中々通用しないことだと思う。しかしもうここらで本当に豊かであることはどういうことなのか、真剣に考えても良い時期にきているとおもう。だいたいテレビドラマをみていても「成金」は最後には自分の人生を後悔することになっているのだから。

空き缶から豊かになろう

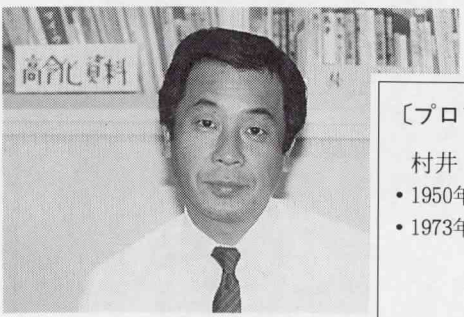
だれも自分の家の前がゴミや落葉や空き缶で散らかっていれば、掃除をするであろう。まあほったらかしの人はそうそういない。なぜなら「汚くしていては恥しい」という気持ちがあるからだ。もちろん「きれいは気持ちいい」ということもあるだろう。この「汚くしていては恥ずかしい、そしてきれいは気持ちいい」というそれぞれの人が必ずもっている思いの対象の範囲をうまく拡大していけばよいのではないだろうか。ただ、こう書けばなんとなくうまくできそうな気もするが、実際は人の心に訴えることだけに実現は難しいと思う。しかし、例えば今年から全トヨタ労連が始めた「クリーン・グリーンキャンペーン」と称した、清掃活動と緑化運動はこの「人の心に訴える何か」を醸成するきっかけ作りの活動として価値ある試みであると思う。この活動に参加して「気持ち悪く思った人」は少ないはずだ。できうれば今年の様に生活の場から掛け離れた観光地等で実施するのではなく、もう少し生活の場に近い「個々人の家のまわり」からはじめて「家の近くの公園や道路」そして最終的には「自分達が暮らし生活する街」がきれいになるといった様に、それぞれの人が「汚くしていては恥ずかしい、そしてきれいは気持ちいい」と思える範囲を徐々に拡大し、そうしていることが普通に思えるような活動がもっと様々な場でおこなわれれば案外解決の道が開けていくのかもしれない。そして「昔はくだらないことで悩んでいたわねえ」と思えるようにしてゆきたいものだ。

物質的に豊かになったことによって、私達は様々なものをその代償として失ってきたとよく言われ

る。その為に失ったものを昔のように戻そうなどということはなかなか難しいことだと思う。それよりは今の豊かさをちょっとした発想の転換と私達の努力で、いや努力という程力の入ったものでなく配慮程度の気軽なものでより豊かにすることはできないだろうか。つまり缶ジュースや缶コーヒーを否定するのではなくて、その便利さを皆が享受し続ける為に「ちょっとした配慮」でもっと豊かになれるんだということを、皆が気づき実践する、そしてその為の「気づき」の場をいましばらく増やしていく活動が必要であると思う。いまの豊かさは「成金趣味」などとさんざんこきおろしたが、そのなかにもこうした思いが浸透してゆけばいずれは本物の豊かさにつながっていくと思う。それに、「豊か」だからこそこんなことも考えることができるんだろうし。そしてなにより自分がその考えの信奉者であり実践者で在り続けたいと思う。

2020年に思う

㈶中部産政研　主任研究員
村　井　　清



〔プロフィール〕

村井　　清（41歳）
- 1950年　愛知県生まれ
- 1973年　トヨタ自動車㈱　入社
  教育部，生産管理部，物流管理室を経て，'84年よりトヨタ自動車労働組合執行委員（産対局長），'86年より全トヨタ労働組合連合会中央執行委員（産業対策局長），'88年よりトヨタ自動車労働組合専門部員として，中部産政研に出向
  現在に至る

〈趣味〉　読書（歴史小説，推理小説），自然観察

〈好きな言葉〉誠実

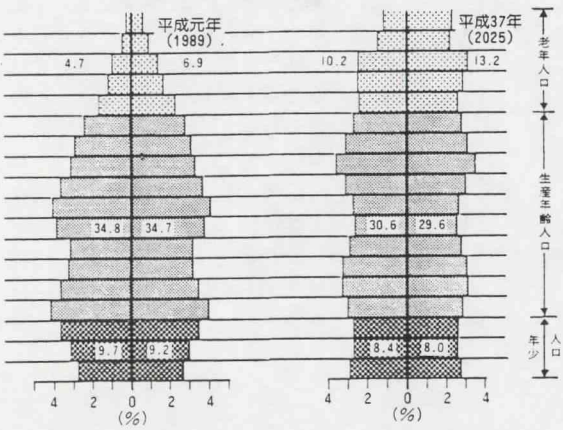
「二千二十年に思う」

二千二十年と言えば今から約三十年後であり、そのとき私は現在の年齢を単純に延長すれば七十歳になっている。この三十年後は私個人にとってはサラリーマン生活をリタイアした後のことであるが、日本については多くのことが予測されている。もっとも大きなそして中心的なテーマは何と言っても「高齢化社会」である。そのときの自分の状態をいかに設定するべきかも考えながら、整理してみたい。

日本の人口構成上七十歳以上は現在約十人に一人であるものが、三十年後には約五人に一人となる。図一は、総務庁が昭和六十年の国勢調査を元に作成した人口ピラミッドであるが、現在の〝ちょうちん型〟が〝ずん胴型〟となる。とりわけ、団塊の世代（昭和二十二～二十四年生まれ）が七十～七十五歳になっており一層この〝ずん胴型〟を強調している。

この団塊の世代は各年二百三十万人で、最近一年間の新生児百二十二万人の約二倍にも匹敵する極めて大きな塊である。とにかくその数の多さからいろいろと目立つ存在であったことは事実である。とりわけ消費者として

図1　我が国の人口ピラミッド



大きな力を発揮してきた。彼らが十代半ば頃には「高校三年生」という歌が流行り〝ハイティーン・ブーム〟が、二十歳前後には東大安田講堂事件もあったが〝ヤング・ブーム〟が流行した。結婚するころの二十台後半には〝ニューファミリー・ブーム〟を起こした。そして一家の大黒柱としての彼らを対象に、つい二年ほど前にある住宅メーカーのCFのBGMにこの世代が青春時代を過ごしたときの歌が使われ、今年、あるカーメーカーは、この世代の登場人物自体が青春時代の歌を唄うシーンで共感を呼んでいる。おそらくこれからも大きなインパクトを与えると思われる。そのはしりが歯科医業界に現れているという。つまり四十歳頃になると、そろそろ歯にガタが出始め入れ歯世代になってくるための需要が現れつつあるという。その年代が三十年後には七十歳台になる訳である。

二千二十年のインパクト

高齢化社会として予測されるその衝撃を列記してみると

① 六十五歳以上の老人を二十～六十四歳者二・一人で支える社会（現在は五・一人が支えている）

② 〝ねたきり老人〟が倍増（現在の約六十万人が百二～三十万人となる）

③ 国民所得に対する税金と社会保険料の割合である国民負担率の高まり（平成二年の四十・四%が五十%程度に）

があげられるし、平行して生産年齢人口の減少に伴い

④ 現在の六十歳台前半層を中心とした高年齢者と女性の労働力化

が挙げられる。

が、どうも明るい活力のあるイメージは浮かび上がって来ない。そこで三十年後がいきいきとした活力ある社会であるためには何が必要かをスウェーデンを例にとりながら、整理してみたい。

高齢化社会先輩国・スウェーデンの状況 ― 公的福祉の可能性

表一は、人口に占める六十五歳以上の割合の国際比較であるが、最も高齢化が進んでいるのがスウェーデンである。この国については高福祉・高負担とか生産は資本主義で配分は社会主義とか言われるように他の国とは政策や理念について特異なものをもっている。

スウェーデンの老人福祉の指導原理は、①正常化の原理、②総合的人間観の原理、③自己決定の原理、④影響力と参加の原理、⑤適性管理に基づく活動の原理、の五点であるという（スウェーデン国広報紙）。平易に言えば、ややもすると老人を特別扱いにし通常活動から遠ざける傾向を改めて、社会の中で活動しよう、させようというものである。昨年訪問した際にレクチャーを受けた在スウェーデン日本大使館一等書記官は、観光客や訪問者が「スウェーデンはやたらと老人と障害者が街中で目につく」という印象を持つことに対して「老人・障害者の社会参加が徹底しているからだ」と説明しているという。

特に老後に対しては、安定した経済基盤、満足な住宅・医療などのサービスについては一級品といえる（表二）。しかし、こうした高い福祉を実現するため国民が負担する税、社会保険料は極めて高く（図二）、悪評もある。悪評いわく「高福祉のために、（税金が高く）働く意欲を削いでいる」「企業活動は国際競争力を維持するために税など負担の高いスウェーデン国内ではできない」など。かつての

表１　65歳以上人口割合の国際比較

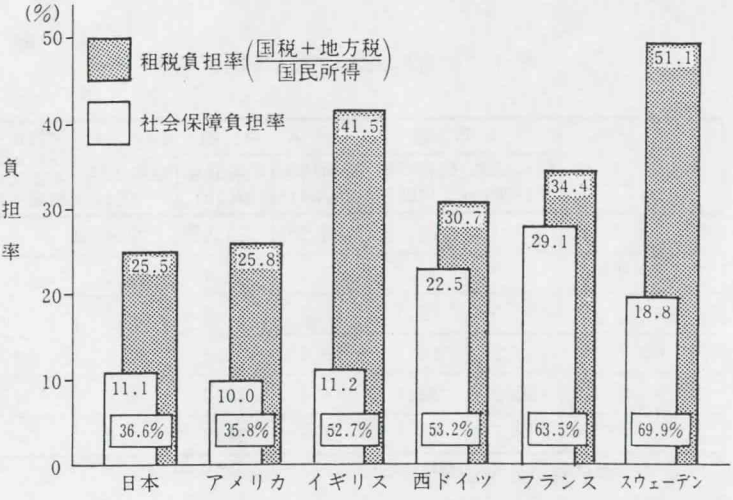
	65歳以上人口割合					7%から14%に到達するまでの所要年数
	昭和45年(1970)	昭和60年(1985)	昭和75年(2000)	昭和95年(2020)	昭和100年(2025)	
日本	7.1%	10.3%	16.3%	23.6%	23.4%	25年
アメリカ	9.8	11.7	12.0	15.4	17.2	75
イギリス	12.9	15.1	15.3	17.8	18.7	45
西ドイツ	13.2	14.5	16.7	21.2	22.5	45
フランス	12.9	12.4	14.7	18.0	19.3	115
スウェーデン	13.7	16.9	17.2	21.9	22.2	85

(注) 日本は国勢調査、厚生省人口問題研究所推計、諸外国は国連資料による。

表２　主な老人向けの制度

年金	• 65歳から支給 • 基礎年金　約43000クローネ（約９万円） • 付加年金　従前所得の60%支給 • 部分年金制度もあり（65歳以前支給）
医療費	• 外来　自己負担60クローネ／回（以前は30） • 入院　55クローネ／日（'89年より。以前は無料）
老親介護保険の導入（'89．７より）	• 老親の介護者に給与の90%までを支給

図２　国民所得に対する租税負担率と社会保障制度負担率の国際比較



男子テニスの世界チャンピオン、ボルグは税金を逃れスイスに移住したという話は有名である。そしてこうした政策を推進して来たのが社会民主党と左翼党（旧共産党）であったが、今年の九月十五日に行われた総選挙では、保守中道四党が政権を握る結果となった。単独政党では社会民主党がトップにも拘らず野党になることを党首が宣言をした。

このスウェーデンが示唆している点を整理すると、①見習うべき点として、ノーマライゼイションの考え方、②福祉には金が必要であり、財政基盤が磐石であること、③福祉に対する国民的合意が必要である、が挙げられる。

まず、ノーマライゼイションの考え方であるが、先に述べた老人福祉の指導原理の中に生きている考え方である。この考え方は、デンマークで実ったもので、いかなる人間も、当たり前の（ノーマルな）生活をする権利があるという主張から生まれたものであるが、日常の中で実行しようとするとむづかしいことでもあ

る。特に老人は家族が面倒を見るべきであるという考え方が根強い日本では、健康な間はよいが、病気がちになると家族にとって大きな犠牲が付きまとう感じがあるが、これは改善されるべきものと考える。誰しも、健康体のままで老いて家族を始め大きな世話もかけずに生涯を終えたいものであるが、現状では世話は家族に頼ることが主である。親を面倒見るのは子の役割という考え方を否定するのではなく、世話する側・される側が老いるということに対して気楽に考えられるような公的な介護体制が必要である。産政塾生がお世話になった松下政経塾の卒業生である山井和則氏は、著者の中で「今の日本は福祉重視以前のスウェーデンに似ている…企業は人手不足、外国人労働者も受け入れ、出生率低下が問題になり、男女平等が求められていた」とし、転換の一つの機会であるとする。

そして、磐石な財政基盤が必要である。表二でも記述したが、老人の入院は無料から有料へと変更がされたし、九十年度よりホームヘルプ料金が三十％値上げされるなど、高福祉を維持して行くためには財政基盤にかかって来る。政権を明け渡した社会民主党はこの財政確保のためにいろいろな手を尽くした。例えば、法人税を収める企業に対しては国内投資を諦めて海外流出を防ぐために、会社等に対する一定課税四十％を三十％に九一年度より引き下げたり、国民の重税感を和らげるために国・地方の所得税の最高課税率を七十二％から六十五％へ、更に九十一年度からは五十％に引き下げ、変わりに付加価値税を一・五％引き上げた。兄弟国とでも言うべき隣国のノルウェーは同様に高福祉であるが、財政的な危機はない、というのもノルウェーは北海油田収入が大きなウェイトを占めているからである。それに引き換え、スウェーデンは無資源国であり一旦経済活動に停滞が起きると福祉に影響が出て来る。同国は、過去約百八十年間非同盟中立政策で第一・二次大戦の被害を受けず他国が

廃墟と化す中、唯一工業化を推進し現在でも世界的企業は国の大きさの割に多い。そうした中で、最近の経済停滞は歳入面でも手痛いものである。社会民主党の主要政策に完全雇用があるが、ここ二～三年失業率は一・五％前後であったものが、最近では三％になっており、政権後退の材料になったとも言われている。ここで痛感することは、財政基盤が極めて重要で、我田引水的に結論づければ民間の企業の活力が必要であるということである。

第三点目の国民的合意であるが、スウェーデンの総選挙における投票率は八十数％を維持しており極めて政治に対する関心が高い。見方を変えれば選挙自体が与党の政策に対する国民投票的な役割を果していると見てよく、具体的な政策の評価が選挙でなされそれが国民的合意になっている。高福祉・高負担の程度についても今までは支持を受けて来た訳であるが、その下地づくりの一つとして、小学校一年生の教科書で、税金のつかわれ方をとりあげる努力もある。

他の国とは比較にならない早さで高齢化社会に突入する日本としては、具体的にどんな社会を作りそのための財源をどう確保するのかの提示と合意作りが求められている。超高齢化社会到来までにそれほど十分な論議のための時間が残されている訳ではないと思う。私見であるが、特に年老いてから病気になった場合の設備や対策がある程度用意され得るものであれば、若い健康なときの負担は苦にならないと思う。

さて、自分はどんな備えをすべきか

当年四十歳。企業籍に身を置いての約二十年（もっとも労働組合関係が約七年ほど入っているが）を除くと、六十歳定年と仮定して組織人としてあと二十年、更に定年退職してからの二十年が自分に与えられた人生である。現在の自分の一日を考えてみると、朝七時頃に家を出て二十時頃家に帰る訳で約十三時間を〝勤め〟に費やし、七時間の睡眠を取り、残り四時間程が自分と家族との時間である。そして週休二日休みというパターンで一週間の生活をしている。そして充実した毎日を送っているのであるが、考えてみるといかに〝勤め〟中心であるかが分かる。〝勤め〟の期間はそれに全力投球することは当然であるし、そのことの中に現在の張り合いや生きがいがあると考える。

が、仮に将来に対する何の備えも持たずに定年を迎えたとしたらどうなる事であろうか。ちょうど現在の自分に「定年後の一週間の行動予定を作って下さい」という宿題が出たと同じことで、まともな一週間の予定表は完成できない。では準備として何をすべきなのであろうか。せいぜいそんなことにならないように今から自分のライフワークを見付けることを心がけるしかない。あるいは〝好きな仕事〟を続けることも考えられるかもしれない。いや、ライフワークにしろ仕事にしろ健康でなくては物事始まらない、だから体にいいことをやろうなどと、何とも夢の無い話になって来てしまった。

孔子いわく「四十にして惑わず」とあるが、これからも惑いそうであるが少なくとも悔いの無いあるいは後悔を最小限に止めることを考え、二千二十年の時代が来たときに〝思い描いていた世の中〟に近いものをつくる努力をして行く以外に無さそうである。

――参考文献――

- 「あなたの長寿社会読本」中島義雄著　ダイヤモンド社
- 「スウェーデンハンドブック」スウェーデン社会研究所編　早稲田大学出版部
- 「日本の将来推計人口」厚生省人口問題所研究編　㈶厚生統計協会
- 「体験ルポ世界の高齢者福祉」山井和則著　岩波書店

最近想う３つのこと

㈶中部産政研　事務局長

十　亀　義　則

〔プロフィール〕

十亀　義則（55歳）

- 1936年　愛媛県生まれ
- 1957年　松山外語短大卒業後，自動車セールスマン，陸上自衛隊でのデポ勤務を経て
- 1963年　トヨタ自動車へ入社，同元町工場に勤務
- 1967年　トヨタ労組・全国自動車・全トヨタ労連の専従役員
- 1986年　全トヨタ産業政策研究会の事務局長から現職に至る

〈モットー〉相手の立場に立って物事を考える

〈家族〉　妻，娘の３人暮し

一　家族の触れ合いを大切に

先日、クイズ百点満点でお馴染みの人気キャスター田畑彦右衛門さんの講演を聞く機会があった。さすがＮＨＫ社会部の記者、ニュースデスク、解説委員などを経験している方だけあって話術、内容ともよかった。話は世の中の動き、時代のトレンドをうまく整理、分析され、これからはゆとり百点満点で新しい文化、家族関係、地域を作っていかなければならないと言う話しであった。

それを時代のトレンドとして表一にまとめてみましたのでイメージ的に読みとっていただければと思います。

時代のトレンド　（表一）

	戦後・成長	情報・サービス	高齢化	国際化
仕事	完全雇用	ソフト化 女性の進出 若手不足	65歳定年	外国人労働者
環境	賃金 時間 安全	週休二日 短 育児休業	年金保険制	度
生きがい	働く	余暇 ボランティア		

この時代のトレンドを見ているうちに、政治・経済・社会とも反省期に入っているような気がし

て、今こそ原点に立ち返って考えてみる必要があるように思われます。そして、ある学者が四十年周期説を言われたが、その通りになってきているような気がします。

例えば、今一番大切な家族関係にしても高度成長の時代から今日まで核家族化がどんどん進んだ。しかし、今では少しずつ元に戻りつつあるように思います。身近なとなり近所を見てもそのようであり、二世帯、三世帯の同居家族が増えています。それは夫婦共稼ぎ、家事分担、育児にも好都合で血の通ったスキンシップが出来るからだと思われます。そして何よりも異常とも言える高騰したマイホームの取得の心配もいらない。親子二世代ハッピーということに相成なるわけです。さらに、今必要な「ゆとり」と家族との触れ合いが出来るからであります。そして、となり近所との付き合い、地域活動への参加も今までの付き合いをベースにさらに深めることが出来てきます。そうすれば今までの核家族化のマニュアル社会から解放され、働きながら自分の生きがいも、世間に尽くすことも、新しい家族関係を作ることも、新しい文化、生涯教育も育んでいけるように思います。

二　青年海外協力隊への積極的なチャレンジを！

うちの娘が、ここ二年ぐらい夏休みを利用してタイ国へのボランティアに出掛けた。聞いてみると、タイのチェンマイ地方の田舎に中学生の寄宿舎を作るのが目的と言う。これには豊田市内の勤労青年十数人が中心になって「タイ国の辺地で学校が自宅から離れて通学できないことへの建設費や労力を提供して建てに行く」民間使節であると言うことがわかった。娘に「それはいいことに参加しているね。今流行のグルメ、買物ツアーと違って現地の人との国際交流が魅力だなぁ」と言って励ました。

しかし、このことを実施するに当って、かなり早い段階からの準備が必要でよくもここまでこぎつけたなぁとも思った。その現地の様子をビデオにおさめて来たと言うので見たが、なるほど手作りで、竹と茅葺きのような家で日本円で一棟が七万円ぐらいで出来る寄宿舎だそうですが、自分たちで異国の地で作った喜び、感謝され、別れを惜しむ中学生など、わずか一週間ぐらいと思うが、子供と一緒に溶け込んでいる様子、グループの勤労青年の皆さんはいい経験をしたなぁと思うし、国家レベルで考えても大変いいことをしたと思います。

その時にふと思ったのが青年海外協力隊の事です。この産政塾でも体験者のお話を聞いたようですが、やはり発展途上国に対し、技術・技能を持った二十歳～三十五歳までの青年を派遣し、経済社会開発に協力することは大変いいことであると思います。最近一部の企業でも、この制度を支援し、現職のままで参加と言うところも現れた。例えば、トヨタ自動車の例を見ると左表のようになっている。

トヨタ自動車の青年海外協力対への現職参加制度の概要

㈠適用条件	・原則として協力隊参加後、直ちに復職する者 （協力隊の選考に合格する要あり）
㈡休職中の取扱い	
①休職期間	・活動に必要な期間（約二年四ヵ月）
②賃金	・協力隊参加直前の基準賃金及び家族手当の全額を支給 （期間中固定）
③一時金	・協力隊参加直前の一時金を全額支給（期間中固定）

④勤続通算	・全期間を退職金の勤続年数に通算
㈢復職後の取扱い	
①職場復帰	・個別に判断
②資格・基本給	・同年次入社者の昇格・昇給を考慮し決定

大変結構なことだと思います。私、二年ぐらい前にトヨタ生協カルスポ（カルチャー&スポーツ）館の英会話教室を覗いてみたことがある。それにチャレンジし、一生懸命に英会話を勉強していた一青年の姿が思い浮かぶのです。是非この種の活動に積極的に参加する人が増えるのを期待しています。

それに引き替え政府開発援助（ＯＤＡ）は、社会経済の発展と福祉のために使われている資金で、制度、目的は大変結構ですが、年々拡大し、金額もここ一～二年支出総額ベースでアメリカを抜きつ抜かれつ、ほぼ同じ世界最大の援助国になったと報告されています。そして、一九九二年までの五年間で総額五百億ドルという中期目標を達成しなければなりません。しかし、日本のＯＤＡをめぐる援助したプロジェクトの評価がよくない。例えば、インドネシア・スマトラ島のコタパンジャン・ダムの建設をめぐって、水没地区民の立ち退きやスマトラ象三十数頭の生息地が奪われる。十一～十二世紀のムアラ・タクス仏教遺跡が影響を受けることからもめている例や、立派なハイテクを駆使したような施設を造ったものの、使い方、メンテナンスが出来なく大変困っているというような話を聞いた事があります。

これなど現地のニーズにあった援助政策がとられていなかったり、民間企業の利益本位での活動などの結果だろうと思います。地球環境問題が大切な今日、やはり基本的な考え方、哲学を持って、現

地の人が何を求めているのか、しっかり調査し、援助するよう期待しています。そのためには、もっと現地の出先機関を中心に援助スタッフの充実が必要であります。

三　素人が考える健康管理ＡＢＣ

この春、久し振りに中学時代の同級会の話しがまとまり、古都奈良斑鳩の里に集まった。私達の故郷、母校は、四国松山であるため、中部と京阪神ぐらいと思い、三十名目途で案内したらあっという間に一杯になった。誰でも卒業当時は同窓会も今までの学生の延長と思えたが、五十歳代の後半ともなれば考えることは皆同じであった。つまり経済的にも家庭にもゆとりができ、今までのがむしゃらな人生観からここら辺りで一息いれて、古き良き友を訪ねてみようかという気になるものですね。そして、それにぴったりの場所、斑鳩宮から法隆寺、薬師寺の鐘の音でも聞きながら四十数年前に時計の針を逆戻りさせて童心に帰って語り明かそうと言う企画が受けに受けて口込みで四国や関東の方からも馳せ参じた。

恩師は中学三年生の時の英語担任の宇都宮先生で、大学出だてのハンサムなダブルの背広が似合うのが印象に残っている方だった。その先生には、その当時ワイズミラーのターザン映画が流行っていたのでターザンという仇名がついていた。その先生を見たとき昔の面影そのまま若々しく感じたし、このセンテンスを丸暗記したか、と言われた想いがした。

宴会は予想通り当時を懐かしみ、皆それぞれに思い出話に花を咲かせた。幹事が奈良の西大寺で開業医のためか、皆それぞれ健康の心配事を聞いていた。この年になれば持病を持ち健康には注意して

いるのだなと言うこともわかった。ただ寝るのが勿体ない気がして次々と場所を変えて語り深夜2時頃まで続いた。誰ともなく次の日はゴルフじゃけん寝ようやと床に着いたら興奮して寝られなかった。

正に四十数年前奈良の修学旅行で泊まった時と同じ気持ちだった。次の日は法隆寺CCでゴルフと洒落たが、ここでも健康談義が続いた。その時同じ組にやぶ医者曲がりのことを言った旧友がいた。それはおよそ次の三つの点であった。

一つは肥えるのは色々な所に無理がいくから体によくないよ。そしてぶくぶく肥えるのは自制心がない証拠。自分をコントロール出来ないようなものにはリーダーになる資格がないよ。これには他の三人もジャブパンチを食らった思いだった。

二つ目は、それに追い討ちを掛けるように、私のラウンドする姿を見て一日一回は鼓動を打っているのを確かめるような運動をせよ。あんな歩き方では、またハウスで飲んで食って肥えるだけと言った。これもずばりでズシンときた。また日常生活の中で、体を動かしてドキドキするようなことはやれていないのも気になった。

三つ目は、一度自分の体をクリニックしてみたらどうか。今本当にリラックスしながら入れる人間ドックがあるからと予防保全で金をかける方が得だよと示唆を受けた三人だった。自分は健康診断を受け、自分の悪い所は知っていると思った。しかし、言われてみると心配だった。それぞれ、それなりに納得したようであったが、まあ言うは易しく行うは難しいが、そう言えば、アメリカのトップマネジメントに肥った人はいない。よくジョギングしている姿を見掛けると一人のパートナーが加勢した。

私もここ五年ぐらい成人病の高血圧に悩まされ、投薬の生活だが、旧友の言われた三つの事は健康を維持管理する上で重要な基本的なポイントのような気がします。

四　三つのキーワードのまとめ

最近「ゆとりと豊かさ」がすべてのキーワードとなり、情報・サービス化、高齢化、国際化の時代を迎え、構造的な若者、技術者不足の中、今何が一番必要なことか原点に返って考えてみることが必要であります。その根幹にはまず「ゆとり」があって「**家族の絆、触れ合い**」があることであります。そして国際的に、地域的に「世間に尽くす気持ち、**ボランティアの精神と活動**が必要」であります。

そして新しいライフスタイルの節々でリッチに過去を振り返り、昔の人の今迄の良さを取り入れ、新しい一歩を踏み出すためにも「**健康な身体第一**」でありたいと願う今日この頃であります。

産政塾活動記録

第一回会合（開塾式）

- 日時　一九九一年一月三十日
- 会場　愛知労済豊田会館
- 内容　塾長　梅村志郎を囲んで、塾生の問題意識等意見交換。
  運営のルール作り。

第二回会合

- 日時　一九九一年二月二十八日～三月一日（一泊二日）
- 会場　松下政経塾
- 内容　松下政経塾への訪問交流
  - 塾長　宮田義二氏の講話。
  - 松下政経塾　塾生が取り組んでいる課題の発表。
  - 松下政経塾生との深夜に及ぶ意見交換。
  - 早朝鍛錬　等
- 参考図書　「松下政経塾　塾長問答集」～塾生との対話～　松下政経塾編　ＰＨＰ研究所

第三回会合

・日時　一九九一年四月二十三日
・会場　愛知県刈谷勤労会館及び㈱豊田自動織機製作所「シャインズ」
・講師　金城学院大学文学部教授　山本郁郎氏
・内容　「東南アジア諸国との望ましい関わり方を模索する」
　～インドネシアでの経験をもとに

第四回会合

・日時　一九九一年六月三日
・会場　日本電装㈱遊亀荘
・講師　青年海外協力隊　体験者　中村光之氏（中部日産ディーゼル㈱現職参加）
・内容　「青年海外協力隊に参加して」
・ケニアでの自動車エンジニアとして活躍された体験談をフィルムを流しながら。参加への思いとそこで自分が得たもの、休職制度を利用して参加した後の現在の思い。

第五回会合

・日時　一九九一年七月十二日
・会場　中部電力㈱若竹クラブ
・講師　京都シルバーリンク代表幹事、京都南病院顧問　玉川雄司氏
　京都ボランティア協会　山井和則氏
・内容　「豊かに生きること」
　・老人福祉及び老人の社会参加を通して、今私達が福祉活動に対してどういった関わり方ができるのか。
・参考図書　「老いを生きる」～極楽寺講話会録～　鵜飼慶範編　白馬社発行
　「体験ルポ　世界の高齢者福祉」　山井和則著　岩波新書発行

第六回会合

・日時　一九九一年八月一日
・会場　名古屋市中小企業センター
・講師　福祉教育研究会　主宰　木原孝久氏
・内容　「企業に勤める者と地域福祉の在り方」

・それぞれが福祉を通して生きあう「共存共栄」の為に企業に勤めるものは、なにができるのかを模索。

・参考図書　「良き市民としての企業」　木原孝久著　カルティベィト21発行
「市民から見た『企業市民』」　木原孝久編　㈳日本青年奉仕協会発行

第七回会合（閉塾式）

・日時　一九九一年九月二十九日～三十日（一泊一日）

・会場　全トヨタ労連研修センターつどいの丘

・内容　塾長　梅村志郎との個人面談を通して、半年間の活動から得た自分の問題意識と考えを討論。
本の書きおろし。

あとがきにかえて

全七回、日数にしてみればわずか10日たらずの活動であった。しかしこの異業種の若手の集まりは、会社という枠を超え異なる世界の講師の方々や仲間の異なった視点からの物の考え方にいくばくかふれることにより、私達に時間では換算できない「考えるヒント」を多く与えてくれたのではないかと自負している。

とりわけ交流をさせていただいた講師の方々は、様々な仕事に就いておられる様々な年齢の方々であった。誰一人として私達の様なサラリーマンではなかったが、違う世界を生きて来た方々だけに「なまいき盛り」の私達にとって、心に残る言葉が数多くあった。

ここではその講師の方々の話の中から、事務局のメモを頼りにその幾つかを書き留めておきたい。

「便所の掃除もできん者が、どうして国の政治ができようか」

松下政経塾への訪問交流はそれだけで本が一冊できてしまうくらい印象の強いものであった。とりわけ同年代の青年が、心から日本を良くしていこうと真剣にとりくんでいる姿は、感動と同時に彼らほどには真剣に今の仕事にさえ取り組めていない自分自身にいらだちさえ感ずる出会いであった。

特に私達の心に訴えるものがあったのは、今回の交流をコーディネートして下さった研究開発グループ主担当横尾氏から伺った、松下幸之助塾主の表記の言葉である。私のつたない解釈によれば

「変えたい！と心から思うのであれば、自らの足元から変えなければだめである。自らが動かなければだめである。〝掃除〟はそういう意味ですべての第一歩である。また〝掃除〟といってばかにするなかれ。ただ漫然とする者には何も与えないが、いかにすれば効率よくかつきれいにできるかを考えてやればそこから〝経営〟や〝政治〟を行うにあたっての多くの示唆が得られるであろう。」ということだと思う。禅問答めいてはいるが、この言葉は忘れ難いものとなった。

また、塾長である宮田義二氏の講話も世界情勢からはじまり当面する労使の課題へと実に具体的に示唆に飛んだお話を伺うことができた。とりわけ最後にこれからの産業人・企業人として心に留めておいてほしいこと、ということで示された3つのポイントを書き留めて置きたい。

① 私達の基準は「良識」である。これが唯一無二のものさし。

② 自分達が社会的責任をとれる行動をする。

③ 日本の経済を支えているのは、良好な労使関係を基盤にしていることを忘れないで欲しい。

一泊二日で実施したこの交流、翌日はその「便所の掃除」から始まる早朝鍛錬にも参加し。理念だけではない、実際やってみる「運動体」であるという彼らの姿勢を共に僅かの時間ではあったが共有できたことは、私達にとって多くの感銘とともに強烈な刺激を受けた体験となった。

「社会の多様性を理解しよう」

時々テレビ等で外国人に世界地図の中に日本を書き込ませたり、日本の首相は誰かを言わせたりする企画がある。ほとんどの場合彼らは、へんてこな位置に日本を書き込んだり、首相の名前なん

てまあ言える人はいない。それをみて私達は「なんて常識のない人達なんだろう」とか「世界の日本くらい覚えておけよな」と思ったりする。

では私達日本人はどうだろうか。アメリカ合衆国はどこ?大統領の名前は?と聞かれれば、まあ大抵の人は答えることができるだろう。しかしインドネシアはアジアのどこにあるの?大統領の名前は?宗教は???知らないんである。そして知らないんだけれど、そんなこととは関係なしに東南アジア諸国との関係は益々深まってきている。また日本の企業も進出を続けている。ボーダレスの時代が進み私達が「日本人」ではなく「国際人」として生きていかなければならない時に、そんなことも知らないでやっていけるんであろうか?これが山本先生に教えを願ったきっかけとなった。

1、社会の多様性を理解しよう

世界のどこの国もそうであるが、多民族・多宗教・多言語である。これらが多様であるということは、生活習慣も異なれば、考え方も異なるということ先ず知り、理解することは非常に大切なことである。

2、開発政策の中の「二つの顔」

東南アジアの多くの国は、近年の開発政策の急激且つ膨大な推進によって「活力ある社会」と「貧困の中にあえぐ社会」の両面をもっており、両社会の間には極めて根の深い差が顕在している。

例えばインドネシアでは、日系企業を始めとした「恵まれた雇用」に就けるのはごくひと握りの人々であり、多くは「恵まれざる雇用」に就いている人々だ。そうした雇用環境の中で、彼らは「恵まれざる雇用」を独り占めするのではなく、自らの雇用の一部を友人に貸し与えるなどし、所得は減るが互いに機会を増やしわかちあうという美しい慣行をもっている。また彼らは行き当たりばったりで仕事に就いているのではなく、少しでも経験を重ねステップアップするという自覚的な考えを持ってやっている。いかんせん経済全体の底上げがうまくなされない為にそれにも限界があるが。「やる気がないから仕事に就けない、就いていない」のではなく「充分やる気もありキャリアのステップアップに対しては積極的であることも知っておいて欲しい」

「お金持ちの日本人が物を買って与えるのは、本当にいいのだろうか。」

第四回は青年海外協力隊を現職参加された、中村光之氏の話を伺った。氏はケニアへ「自動車整備の指導」ということで派遣をされ二年の任期を全うされつい半年程前に帰国をされた。

氏は高校卒業時にこの協力隊に参加しようと、一度チャレンジしている。しかし「これは旅行ではない、技術を持った人が確固たる信念をもって参加するものだ」と教え諭され断念。これを機に彼は職業訓練校へ入学しそこで自動車整備士の資格を取る。卒業後就職をし、日々の忙しさに流されるうちにこの思いも次第に薄れてきたが、やはり思いは断ち切れず、就職して五年目に応募し参加した。

参加するにあたっては「行きたいという思いの他に思い当たるほどの動機もないまま」結構軽い

気持ちで参加してしまったが、現地に派遣されそのなかで自分が結果として得たものは想像以上のもので何物にも変えがたい宝になったという。

この青年海外協力隊活動、実はＯＤＡの一環として行われている。ＯＤＡの活動は幾つかに分かれて実施されているが、簡単にいうと「物を寄付する行為」と「人を派遣し技術援助をする行為」の二つにわかれるそうだ。現在日本は世界でも1、2を争うＯＤＡ実施国なのだが、その殆どが前者、すなわち「物を寄付する行為」で行われているという。

しかし中村氏の言葉を借りれば「現地が欲しているのは物ではなく、それを使いこなす人材の育成であって、どんなに性能のいいものを贈っても現地では宝の持ち腐れになっている」というのが現状らしい。それに比べてアメリカや欧米諸国からは実に様々な職種の協力隊に相当する人達がもっと条件の悪いところへ、日本の協力隊より待遇が悪くても行って指導しているという。今日本がやっていることがその金額ほどには、その国の為になっていないというのは、我々も新聞等で読んで何となく知っていたが、体験者からの実話として聞いて認識を新たにすることができた。

「福祉は「お恵み」ではない」

第五回の講師としてお招きした玉川雄司氏は京都シルバーリンクという高齢者のボランティアグループを主宰されている。しかし同時に京都南病院の顧問でもあり経歴としてはここでの仕事が長く、「京都・西陣の赤ひげ」として有名な早川一光氏とも旧知の仲である。

氏には老人福祉に携わってこられたご経験から「豊かに生きることとはなんぞや」といった観点

でお話をいただいた。以下そのお話の中から抜粋した。

「誰だって年をとる。だから自分の問題なんだ。」

予言して絶対に間違いのないことは「あなたは死にます」と「あなたは年をとります」ということです。これは間違いない。必ず年を取るんだから。年齢にかかわらず、みんな自分の問題なんです、高齢化の問題は。ところがまだまだ他人事だと思っている。

キリスト教では百匹の子羊のうちの一匹が迷ったら、その一匹を大切にしなきゃいけないということを言うでしょう。「残りの九十九匹が一匹を救うのは良いことだ」というように日本では理解されている。そもそもここに「お恵み」の考えが見え隠れする。ところが、欧米の人の理解はそうじゃない。弱者を大切にしよう、そんなことじゃない。「私がその一匹になったらどうするんだ」ということを考えているんです。そうしたらね対等なんです。私がそうなったときにもやはり困るだろう、だから当然九十九匹の側にいるときにはその一匹を大切にする。これは上下の関係でない、水平の関係なんです。だから、若い人も、自分も必ずそうなるんだという発想、これを大切にしてもらいたいですね。年寄りを大切にするのはいいことだとか、そんなもんじゃないんです。高齢化問題というのは。これからの高齢化社会は、日本にとって経験したこともない未踏の社会です。若い人も今から考え方を変えておくことですよ。自分の生き方、働き方については自分で考えておかないと。そう思います。

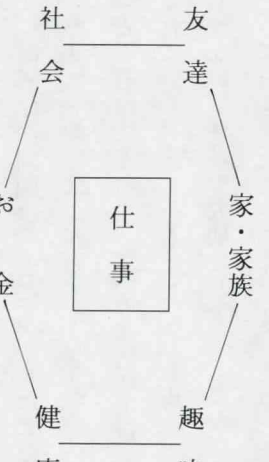
「企業の社会貢献は本業をいかせ」

第六回の講師としてお招きした木原孝久氏は、現在埼玉に居を構え「福祉教育研究会」を主宰されている。

氏には「企業に勤めるものと地域福祉の在り方」といった題でお話いただいた。

「ゆたかさのダイヤグラム」

「ゆたかさ」というがそれは何で構成されているかを考えるとよくわかる。



「仕事」を中心として発想できるものは、私達男の場合お金にしか向かわない。女性にこれを考えさせると、非常にバランスよく描かれる。30代の妻が捨てたい物の中に「引き出物」にまじって「夫」が入っている。また「あなたは誰と旅行に行きたいか」と聞くと夫は妻と行きたいと60%が答えるのに、妻は夫と行きたいと30%しか答えない。妻は夫を捨てたくなり始めた。

私達がこのゆたかさのダイヤグラムをより多方向に膨らませれば、社会はもっと変わってゆくのではないでしょうか。

「福祉＝恵まれない人」？

もうこれは、はやらない、「助けてくれ」などと誰も言っていない。私はどうか、私は豊かに生きたい、だから「私発」の福祉なんだという発想が大切。障害者だってその人の運命はその人が決めるんであってボランティアがきめるんじゃない。恵む活動はもうはやらない。

「企業の社会貢献というが」

たとえば先進事例としてよく「社員を福祉団体に派遣する為の休職制度」などが紹介されるが、確かに派遣される本人は言ってる間は気分がいいとおもう。しかしその人は会社に戻ったらどうだろうか、多分「浦島太郎」だと思う。技術畑の人ならなおさらだ。だからこれは続かない。いずれマンネリになる。

何がいけないのか！「ころんでころびっぱなしだからいけない」企業は元をとればいいんだ。例えば、会社の技術を持って行って、そこで試してみる。その成果をもって帰ってくればいいし、それくらいのガメツサが企業にあって当然。福祉施設だって身一つの男をもらってもしかたない。「企業は企業であることを忘れないで欲しいし、本業を福祉の場でも活かすことが一番為になると思う」

「男をボランティアグループの全日制会員にしようなんて甘い」

先程ゆたかさのダイヤグラムを描いたが、じゃあ男も会社をやめたり休んだりして、例えば福祉

活動をすればいいかというと、それほど暇じゃない。世の中によくあるボランティアグループの共通の悩みは、女だけであるということ。そして「企画や組織運営、経理」などが弱いことだ。これを助けてみるのも会社に勤めるものの参加の可能性かもしれない。でも「全日制会員」になって活動するほど暇ではない。じゃどうすればいいか、「男」はどこにいるか？「会社」にいる。では呼んであげて「会社にくれば企画のうまい建て方教えてあげます」とか「経理の簡単な知識教えてあげます」とすればいい。それもなにも長い時間、一年とか一箇月とか一週間参加する必要はない。ほんの二～三時間そういうグループに手ほどきをしてあげるだけでも随分助かるし、立派な社会貢献なんです。

「社会貢献は本業を使うこと」と結論づけた氏の言葉が印象にのこる会合であった。

この他にも講師の方々からは多くのことを教授いただいた。人によりその受け止め方は様々で、ここにわたしがまとめたような解釈はしなかったかもしれないが、なにはともあれ、なんらかの刺激を受けたことは確かだとおもう。

また、塾生同志の話し合いの中からも、相互に教えあい学びあうことが数多くあったとおもう。仕事のやり方などという固いことばかりでなく、百貨店のメンバーからは「うまいネクタイの選び方」や「女性の多い職場での心得八カ条」などというおよそ私達を送りだしてくれた会社や組合の人達が聞いたら「なんや、まじめにやっとるかと思えば。とんでもないやつらだ」とおしかりを受けてしまいそうな話し合いもあった。これとてこうした機会でもって知り合うことがなければ一生

知らずに済んでいってしまうことで、いや特段知っているからといって何の役にたつわけでもないが……まあそういうこともどこかで役に立つものであるということでお許し願いたい。

最後に、前例にならってこのような「本」を出すことは、お互い照れもあってなかなか踏ん切れなかったが、全員の賛同でもってとにかく四苦八苦しながら出すことができたことを互いに称えたいし、こうしたチャンスを与えてくださった各組織の方々に、塾生を代表して御礼申し上げたい。

産　政　塾

1991年12月12日　第1刷発行

編　者　財団法人 中部産業・労働政策研究会
住　所　〒471
愛知県豊田市山之手8丁目131番地
愛知労済豊田会館
ＴＥＬ　0565－27－2731
印刷所　（有）第一プリント社
製本所　山　本　製　本

産政塾

塾　長　梅村　志郎

塾　生

トヨタ自動車㈱　朝位　克
全トヨタ労連　伊藤　哲
名古屋鉄道㈱　太田　雅也
アイシン精機㈱　大町　重人
東海銀行㈱　桑山　幸次
日本電装労組　小西　正晃
トヨタ自動車労組　高橋　恭弘
豊田合成㈱　種市　章
中部電力㈱　丹羽　漸
日本電装㈱　松下　恭規
㈱松坂屋　萬谷　孝之
全松坂屋労組　水野　和明
アイシン労組　水野　真二
トヨタ車体㈱　山内　潔
㈶中部産政研　梶田　宜孝

㈶中部産政研　村井　清
㈶中部産政研　十亀　義則